

【作者の言葉】

『巨人荒野』は、永遠に続く物語である。

書き手も読み手もうんざりするだろうが、書き手は惰性だし、読み手は皆無だから、どうでもいい。

然しながら、永遠に続く物語を、書けるものであろうか。

始まりがあって終わりがあるのが物語だから、終わりのない物語に作者として耐えられるのか。

業病難病にも金欠病にも耐えられたし、いまも耐えているのだから、どうにかなる。

吾の信条は、「どうでもいい」と「どうにかなる」だから、信条通りの作品が書けることの、恍惚と不安が吾にはある。

ともかく第二部が始まる前に、【登場人物一覧】を新しくまとめる。

読者のいない物語にこういうものが要るのか、と疑問に思われるかもしれないが、あくまでも作者の覚書として要るのである。

あらためて云うまでもないことだが、『巨人荒野』は、百年後の読者に向けた未完の大河小説である。

探偵たちや刑事たちが主要人物になっているが、むろん、いわゆる探偵小説でも推理小説でもない。

ここに時として娯楽性や享楽性があったとしても、それらは枝葉末節にすぎない。

数百年数千年前から延々と続く、物語のなかの物語と同様に、「人間はどう生きるべきか」及び「人間はどう死ぬべきか」が、この物語の主題である。

決して解決されることのない文学永遠の主題が、この永遠に続く終わりなき物語の主題になるのは、あらかじめ約束された黙契である。

だれと交わした黙契かはあえて云わないが、吾の文学を多少齧った人たちなら、云わずとも解ってくれるにちがいない。

百年後の友よ、読者よ。

吾の孤軍奮闘を喜び給え。

吾の荒唐無稽を怒り給え。

吾の七転八倒を哀れみ給え。

吾の融通無碍を楽しみ給え

【第一部前半のあらすじ】

本作は長い。
そう感じない人も、登場人物の多さは感じるだろう。
そういう場合、登場人物を忘れてしまうこともある。
そこで、作者はハタと考えた。
ここらで、概要が必要なのではないかと。
沢山の人が読んでくれているわけではない。
しかし、小説は作者と読者の一対一が基本である。
一対一の読者のために、登場人物紹介を含めた、概要を記す。

* * *

一九七〇年。

通称【死んだる団】が、世間を騒がせていた。

【死んだる団】の主な構成員は、以下の通り。

- 過激な反体制主義者の、高杉京平。
 - 元全共闘闘士の、辻中亀夫。
 - 爆弾マニアの、藤上吾郎。
 - 『暗殺論』の思想家・朝山完吉の息子の、京大生・朝山善吉。
 - 大物政治家・松本玄信の息子の、東大生・松本大海。
 - 清水印刷の社長、清水清。
 - それに紅一点、立花雪絵である。
- 私立探偵・舟木英介は、●売れっ子ライターの山内参三から、【死んだる団】の調査を依頼される。
- 舟木英介は、●恋人の川上真希を拉致した犯人が、【死んだる団】の辻中亀夫であると推察していた。
- 山内参三は、別口で、●伝説的私立探偵・麻暮正作にも【死んだる団】の調査を依頼する。
- なお、山内参三は、たまたま●立花雪絵を匿うことになる。
- 麻布署の刑事花井勇太と●寒崎武士警部に雪絵は追いつめられるが、山内は●後輩の新川次郎弁護士の助けを借りて、雪絵を助け結婚することになる。

麻暮正作は、【死んだる団】の黒幕を、●旧敵荒野大三郎だと踏んでいた。

麻暮と舟木は、各々独自に調査を開始するが、舟木は朝山完吉の地元京都へ向か

い、麻暮は秩父の新興宗教〈愛信会〉のメッカに侵入する。

ほぼ同じ頃、●新宿署の敏腕刑事・山風順一は、追っていた藤上吾郎の口から【死んだる団】の存在を知る。

やはり京都へ向かった山風は、そこで〈朝山完吉殺人事件〉に遭遇する。

山風は、●相棒の（花井勇太の弟）花井健太や●手下の小林勘助（●麻暮の手下である小林金助の弟）の力を借りて、真相究明に尽力するが、志なかばで帰らぬ人となる。

なお、山風順一の一周忌が済んだあと、花井健太は山風の一人娘と結婚、希望して入り婿という形をとり、山風健太となった。

それまで朝山完吉としばし共に居た舟木は、●政界の〈ドン〉と呼ばれる松本玄信のボディガードを、再度やることになるが、松本が、●芸術界の巨匠・北山極斎と同一人物であることに気づく。

さらに、辻中亀夫の自死によって、●〈愛信会〉の教祖・日下典禪とも、同一人物であることを知る。

●〈日刊スクープ〉名古屋支局のスター記者・小金井豊は、大臣を刺して飛騨山中に逃げ込んだ、高杉京平との単独会見に成功、●編集局長の山本久治にハッパをかけられながら、【死んだる団】の本質に迫る。

一方、朝山善吉の日記を盗ませた麻暮正作と、山風順一から示唆を受けた、相棒刑事・花井健太は、江の島《秘龍窟》に潜入する。

●長谷在住の流行作家、東剣市から紹介された、●郷土史家の内田晴彦から、麻暮は《秘龍窟》の存在を教えてもらったのである。

花井健太は、《秘龍窟》で【自殺請負所】＝通称【D】なるものを発見する。

また、【死んだる団】と【自殺請負所】の繋がりを知る。

かたや麻暮正作は、●荒野の片腕、川上宙衛門所長を倒し、荒野大三郎と決闘の末、共に海中に没する。

荒野大三郎こそ、松本玄信であり、北山極斎であり、日下典禪であった。

物語は、ここで終わるのではない。

半世紀経った。

二〇二〇年に話は突入。

花井勇太と山風健太の、元刑事の兄弟が、すでに老齢になっている山内参三と舟木英介を訪ねる。

荒野大三郎が活着しているのではないかと考え、相談に行ったのである。

同じ頃、麻暮正作は、手下の小林金助と鎌倉でひっそりと暮らしている。

麻暮は運良く助けられたものの、鉄仮面を付けている。

元刑事兄弟も麻暮たちも、ともに、鎌倉山の洋館が臭いとにらむ。

麻暮と山風は、かつて「秘龍窟」にともに潜入した体験から、今回もともに潜入することとする。

荒野の片腕として、執事風なことをやっている、●松本玄信の元秘書木下弁太郎は、金助に殺される。

麻暮と山風が見たものは、巨大な水槽のなかの「オバケクラゲ」とでも言いたい物体で、それこそが、荒野大三郎の正体であった。

麻暮は、装備された車椅子を発進させて、「オバケクラゲ」を木っ端微塵に破壊し、自らも雲散霧消する。

以上が第一章前半のあらすじであるが、ここまではまだ全容の半分にも充たない。それどころかいままでは「序章」と云っても、いいのかもしれない。

さらに物語は、二〇三〇年へと継続するのである。

これからが「本章」。

だからあらすじはここまで。

新しい重要登場人物としては、●オカマの私立探偵、郷田狂介、●そのお得意様である、榊奈々、●その娘であり、荒野大三郎の曾孫である榊美々、●金助の実子で、元大泥棒の竹田金之助、●麻暮の新しい片腕である、殺人鬼の玄治、●介護ロボットのタナカ、●自称「朝山完吉の生まれ変わり」闇猫と●猫姫、そして、●荒野に興味を深い持つ猪鹿蝶子、●その従妹美村麗子、などなど。

* * *

余計にややこしくなったきらいもあるが、相関を一目できるかもしれないし、作者の志向を垣間見られるかもしれない。

それにしても、こうして一望してみると、作者のお気に入りみんな早く死んでいる。

第一章前半では、辻中亀夫、朝山完吉、山風順一である。

第一章後半では、小林金助、玄治である。

これはもちろん、作者の意図ではない。

哀悼。

【主な登場人物紹介】

- 麻暮正作／伝説的探偵
- 荒野大三郎／謎の存在
- 小林金助／麻暮の凄腕の手下
- 竹田金之助／金助の息子で大泥棒
- 玄治／麻暮の片腕
- 松本玄信／政界の〈ドン〉
- 北山極斎／美術界の巨匠
- 日下典禪／〈愛信会〉の教祖
- 西園寺金時／湘南一の金満家
- 川上宙衛門／「自殺請負所」所長
- 木下弁太郎／玄信の秘書
- 川上宙門／宙衛門の息子で科学者
- 木下太郎／弁太郎の息子で医学者
- タナカ／介護ロボット
- ナカタ／A I ロボット
- 山内参三／人気作家で『死んだる団』を出版
- 舟木英介／私立探偵兼玄信のガードマン
- 朝山完吉／『暗殺論』の大思想家
- 山風順一／新宿署の敏腕刑事
- 小金井豊／〈日刊スクープ〉のスター記者
- 山本久治／〈日刊スクープ〉の編集局長
- 川上真希／舟木英介の恋人
- 立花雪絵／【死んだる団】で後山内の妻
- 高杉京平／【死んだる団】で反体制主義者
- 藤上吾郎／【死んだる団】で爆弾マニア
- 辻中亀夫／【死んだる団】で元全共闘闘士
- 清水清／【死んだる団】で印刷屋社長

- 松本大海／【死んだる団】で玄信の息子
- 朝山善吉／【死んだる団】で完吉の息子

- 小林勘助／山風の手下で金助の弟
- 花井健太／山風の相棒で後養子
- 山風健一／健太の息子で鎌倉署署長
- 寒崎武士／麻布署の警部
- 花井勇太／麻布署の刑事で健太の兄

- 新川次郎／山内の後輩で弁護士
- 東剣市／湘南の流行作家
- 内田晴彦／湘南の郷土史家
- 立原正男／湘南の喫茶店店主

- 榊奈々／「郷田探偵事務所」のお得意様
- 榊美々／岬奈々の娘で荒野の曾孫
- 闇猫／自称「元朝山完吉」他称「悪魔」
- 猫姫／闇猫の娘
- 双子美人／荒野の用心棒

- 猪鹿蝶子／才色兼備の東大大学院生
- 美村麗子／猪鹿蝶子の従妹

- 大介／蝶子と荒野の息子
- 麻子／麗子と麻暮の娘

- 小金井豊子／小金井豊の孫娘
- 山本久子／山本久治の孫娘

- ギャバン／パリの青年
- セリーヌ／パリ警察の刑事
- コテ／セリーヌの配下
- フランコ／イスラム研究家

- 陽羅義光／麻暮の師で無名の作家

- 郷田狂介／超人気のオカマ探偵

第二部／第一章／第一項

生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く
死に死に死に死に死んで死の終りに冥し
空海

願わくは花の下にて春死なん
そのきさらぎの望月のころ
西行

安々と海鼠の如き子を生めり
夏目漱石

君は母の胎内で
柔らかな半透明の泡に包まれて眠っている
アルセーニイ・タルコフスキー

二〇三一年、二月二十日、午前八時。

郷田狂介は、すでに午前六時から自邸兼探偵事務所の一階、依頼人応対用デスクにいる。

机の上に無数の紙片を積み重ね、各種ペン沢山の印鑑各種修正液消去液、タンブラーやミニプリンターも使って一心不乱に仕事をしている。

そのてんでこまいの様子は、生身のニンゲンではなく、まるでアニメのキャラクターだ。

竹田金之助が二階から降りて来た。

「郷田さん、何をしていますんですか」

郷田は下を向いたまま、

「おはよう」

と応えたが、それ以上は云わなかった。

「忙しそうなので、朝食は自分が作りましょうか」

金之助の問いに、生返事を繰り返していたが、きりのいいところで手を止めて、
「確定申告の締め切りまで一ヶ月もないからさあ。

書類や領収書などの、改竄、捏造で、官僚くらい大変なのよ。

あたしはさ、家も敷地もでかいし、資産も稼ぎも多いから、税金も半端じゃない

のよ。

こんな国に税金なんか取られてたまるもんか。

少なくともあんたたちの生活費くらいは、捻出しないとねえ。

あたしは朝食どころじゃないから、あんたたち勝手にやってちょうだい」

「駄目ですよ」

「元泥棒さんに云われたくないわね。

これもあたしの大切な仕事よ」

「なら、余計に朝食を採らないと駄目ですよ。

自分が美味しいクロワッサン・サンドを作りますから、待っていてください。

昨日買って来た、大振りのクロワッサンを温めて、二つに切って、その中に冷やしたハム二枚、こんがり焼いたベーコン三枚、三種類のチーズ、薄切りしたトマトとキュウリ、新鮮なレタスをはさみ、調味料はマスタードとケチャップとマヨネーズに黒胡椒とカレー粉をちょっぴり混ぜて」

金之助の身ぶり手ぶりの調理解説に、郷田は唾を呑み込み、

「もう充分わかったわ。

早く作ってちょうだいな」

そのとき上から美村麗子の素頓狂な声がした。

「ママもお腹すいたー。

プラス二人分よろしくー」

「了解しましたあ」

金之助が機嫌よく返した。

「もう子供産んだ気になって、ママだってさ、二人分だってさ」

郷田が呆れ声でつぶやくと、金之助は苦笑して、

「可愛いもんじゃないですか」

「あたしは子供産めないから、可愛くないでしょうよ」

郷田は拗ねたが怒っているわけではなかった。

朝食の支度ができたころ、

「おはようございます」

と云いながら、パンクしそうなお腹を抱えて猪鹿蝶子が入って来た。

荒野大三郎が麻暮正作によって共倒れにされたとの情報を得た蝶子は、遺産相続でもめることを嫌い、荒野姓から旧姓に戻している。

「お蝶さんはわたしが呼んだのよ。

だから二人分」

麗子が云った。

「なるほどねえ」

と金之助は頷いたが、郷田は蝶子に向かって突慳貪に、

「あんた、何しに来たのよ」

「何しにって、美味しい朝食をいただきに」

「あたしの家はレストランじゃないのよ」
「けれど監獄でもなさそう、玄関だって開いているし」
「あんたがぼんぼこお腹で入って来やすいように、開けているんじゃないわ」
けれども郷田は怒っているわけではなかった。
その証拠にこらえきれずに笑い出した。
和解はすでに正月のパーティで済んでいた。
それでも煩がった蝶子は、羽毛付きのヘッドホンを耳にした。
「あら、暖房弱いかしら」
郷田が気にすると、
「これは胎教なのよ」
「あたしにも聞かせて」
ヘッドホンを奪った郷田は、
「なにさ、これ。
まるで呪いの歌みたい」
「川上さんが録音してきたの。
麻暮先生の師匠のオリジナルソング」

ホラホラこれがわわしの血じゃ
ゲホゲホゲホと飛びだしたじゃ
ホイ命をけずる血のしぶきじゃ
ボロンボロンと死んでゆくじゃ
あいつもこいつも死にゆくじゃ
ダダダれが例外と云うのかじゃ
この世はぜんぜんかなわんじゃ
あの世にまったくかなわんじゃ
人生いろいろごくつまらんじゃ
ホイでもわしはかまわんのじゃ
ナンでもわしはかまわんのじゃ
つまらんもんはかまわんのじゃ
かまわんものはつまらんのじゃ
拘泥したれど無意味があるじゃ
感染したれど有意義がないじゃ
ケケケケツほどもあるないじゃ
プフイフイちもつあるないじゃ

「げげげ、吐きそう」
と、苦虫噛み潰す郷田。
麗子が蝶子を隣の席に招いて、
「お蝶さん、出産予定日は」

「三月十一日よ」

「あら、わたしと同じじゃない」

「しかも麗子が女の子で私が男の子」

「いずれ、結婚させましょか」

「させましょ、させましょ」

二人のママ予備軍のはしゃぐ様子を観ながら郷田は、

(うまく予定日がずれないかしら)

と思った。

べつだん差別的な考えとかではなく、三月十一日生まれの、荒野大三郎の男児と麻暮正作の女兒が、無事に済むはずはないとの予感がはたらいたのである。

「ともかくそんな莫迦なこと云ってると、麻暮さんに叱られるわよ」

郷田に睨まれた麗子は、

「正作さんには、夢のなかで、三回も了解を取ったわ」

「あんたねえ。

麻暮さんと荒野大人の最期を、川上さんから聞いたでしょ。

麻暮さん、きっと化けて出るわよ」

「お化けでも何でも、出て来てほしいわ。

ねえ」

麗子が蝶子に同意を求めると、蝶子も、

「たしかに、お化けでも何でも、出て来てほしいね。

そして、赤ちゃんを抱いてほしい」

郷田はもう何も云えなかった。

二〇三一年、二月二十日、午前十時。

郷田狂介、竹田金之助、猪鹿蝶子、美村麗子の四人は朝食を終えている。

まったく、人生いつなにが起こるか解らない。

「青天の霹靂だー」

竹田金之助が叫んだ。

直後、金之助の顔がみるみる膨れ上がり、三十三秒で二倍になった。

舌も膨れ上がっているのだろう、もはや喋れなくなった。

「どうしたの、どうなっちゃったのよ」

代わりに麗子が叫んだ。

「これは、アナフェラキシーよん」

郷田が云って、119へ連絡をするよう蝶子に頼んだ。

「アナフェラチオってなによ」

蝶子が叫ぶと、
「そんなこと、あんたのエロっぽい声で、いま救急隊に云わないでよ。
あたしが後で説明するから。
さっきのクロワッサン・サンドね。
ハムでもベーコンでもないわね。
トマトでもキュウリでもレタスでもないわね。
チーズかマヨネーズか。
あんた、牛乳アレルギー、いや、玉子アレルギーあるでしょ」
青息吐息の金之助がかすかに頷いた。
「莫迦ねえ、マヨネーズには玉子が入っているのよん」
麗子は、金之助の赤く膨れ上がった顔や軀を氷で冷やしている。
「そんなことやっても気休めにもならないの。
一刻でも早く副腎髄質ホルモンの点滴やらないと、お陀仏になっちゃうわ」
金之助は声にならない声で、
(とても気休めになります)
と云っていたが。
「金之助さーん、お陀仏は厭よねえ」
麗子が声をかけても、金之助はもう頷くこともできない。
「厭に決まってるでしょ。
ベビーちゃんの誕生を一番心待ちにしてたんだもの」
麻暮も金助も玄も亡きいま、郷田は金之助の存在を頼りにしている自分を感じた。
「金之助さーん、いま踏ん張って産んじゃうから、死なないで見てね」
麗子は息ばってみせる。
郷田は呆れ声で云う。
「莫迦なことやってんじゃないの。
そんなことより、呼吸困難だからマウス・ツアー・マウスやって」
「マウスなんかいないわよ」
「莫迦まるだしねえ。
口に口で息を吹き込んでって云っているのよ」
「そういうことは郷田さんがやってよ」
「あたしがやったら、感情が出ちゃうから駄目」
「でも、麗子が唇を許したのは、正作さんだけなのよ」
「どっちが許したんだか。
でも、キスしろって云ってないわ。
ふん、そんなら、あたしが人工呼吸するわね」
「して、して」
「あんたにするんじゃないわよ」

そんなふうには騒いでいたら、救急車が来た。

郷田が同乗した。

しかし救急車のなかで、金之助は息を引き取った。

引き取る前に、郷田の手を握って放さなかった。

その金之助の冷たく硬直した手が、

「ありがとう」

と云っているふうに、郷田には聞こえた。

郷田は泣きわめいた。

「クールな玄さん、情に厚い金助さん、荒野退治に向かったまま消えた侠客麻暮さん、こんどは金助さんの息子の、元大泥棒今大義人の金之助さん。

みんなあたしの前からいなくなっちゃった。

バックボーンだった山風署長も引退したし、ぽんぽこりんの二人分抱えて、あたし一人になっちゃったじゃないの。

麻暮さんが自身を犠牲にして、荒野大人を退治したと信じているけれど、不死鳥の荒野大人が万一復活したら、あたしはいったいどうやって対抗したらいいのよお。だれか、みんなのアンドロイド作ってちょーだい。

ああ神様仏様。

どうせならあたしも早く呼んでよ。

このさい天国じゃなくってもいいからさあ」

郷田はいつまでも泣き止まず、それでも探偵の性分なのか、メールで麗子に報告だけはした。

二〇三一年、二月二十五日、正午。

郷田狂介は自邸兼探偵事務所で、依頼人からの電話を受けている。

依頼を受けるどころか電話にも出たくないほどの精神状態の郷田だったが、そろそろ貯えも心細くなっているので渋々話に乗っているのだ。

相手は、

「湘南一の資産家、湘南一の金権主義者」

と云われている西園寺金時。

以前パーティーで会ったことがあるが、小柄なのに禿げた頭部が巨しく、油断のならない、胡散臭い顔に、妖怪の親玉と目される、

【ぬらりひょん】

を、郷田は連想した。

紋付羽織姿に葉巻をくわえ、くわえたまま話すので、郷田は煙幕を張られた気分がしたものだ。

「要するに西園寺さん。

ここ一ヶ月ほど、クローンやロボットに尾けられ、ドローンに見張られているっ

てことね。

それでその首謀者を見つけてほしいと」

郷田は口数だけが多い西園寺の依頼を要約した。

「そういうことですがの、先生。

ただ湘南の名士としての立場があるわしとしては、相手を傷つけたり殺したりされちゃ困るのです。

陰でこっそりならともかく、日なたで大鈍ふられちゃあもう」

「何をおっしゃるの西園寺さん。

あたしは、か弱い探偵であって、残虐な殺し屋じゃあないわ」

「わしは信用しておりますがの。

でも湘南の噂では、先生は殺し屋よりも残虐で、陰ではすでに十人ほど抹殺しているとのことなのでう。

その数は、例の伝説的な探偵麻暮正作に匹敵するとか。

念の為あくまでも念の為ですがの」

「そんなこと云うなら、他の探偵に依頼すればいいじゃん」

と郷田は云おうとしたが堪えて、

「解ったわ西園寺さん。

充分自制するから大丈夫よん」

さっそく郷田は稼働しようとしたが、久しぶりに仕事が入ったので久しぶりに食欲が湧いた。

(腹が、減った)

二階に向かって大声をあげる。

「麗子ちゃん、蝶子ちゃん。

いつまでお喋りしてるのよ。

ランチにしましょ」

それからキッチンに入り、チャーハンを作り始めた。

もちろん玉子抜きで。

二〇三一年、二月二十五日、午後三時。

郷田狂介は葉山の高台の、西園寺金時邸の前にいる。

西園寺邸は、郷田邸を二まわりほど大きくした洋館である。

最近のマンションラッシュで、郷田邸からは鵜沼の海と海岸は見えなくなったが、西園寺邸からは葉山の海も海岸もよく見える。

思わず郷田は、

「ちちっ」

と舌打ちをした。

郷田は、西園寺を尾けたり見張ったりする「首謀者」が、自分の知人であることも想定して、変装をしている。

湘南ギャルの恰好をしたつもりだが、なにしろ寒い日だし着込んでいるから、場末の盛り場のオカマにしか見えない。

しばらくうろうろしていると、曇り空の頭上にドローンが見え、坂の下からロボットがぎこちない急ぎ足で登って来るのが見えた。

ロボットは金ぴかの新型だったが、どう見ても知っているタナカらしいので、郷田は気さくに声をかけた。

「ひさしぶりじゃないの、タナカちゃん。

てっきりガラクタになっているかとおもったけど、すっかりきれいになっちゃって。

あたしのこと、わかるかしらん」

「コンニチワ、郷田サン」

タナカは、変装した郷田をすぐに見破ったが、なんとなく声が暗かった。

「なにやってるのよん。

未来計画カンパニーも復活したばかりって聞いているけど、あんたも忙しいんじゃないの」

「ソレガソノ」

タナカはじつに云いにくそう。

「美々ちゃんの命令ね。

西園寺さんの何を探っているのよ」

「ソレガソノ」

「あたしもさあ、依頼人第一の探偵だからね。

つまらないことしてたら、ただじゃおかないわよ」

「ソレガソノ」

「はっきり云いなさいよ」

「美々社長デハナク、川上副社長ノ命令ナノデス」

「川上宙門、まだ改心してなかったのね」

郷田の顔色が変わったので、タナカは正直に告げようと、ロボットながら考えたのかもしれない。

「ソレガソノ、美々社長ガ誘拐サレタノデス」

「げげっ、なによそれ。

誘拐されたなら、どうして警察に行かないのよ。

すくなくともあたしんとこに、どうして来なかったのよ」

「川上副社長ハ、変ナ動キヲシテ、オソラク、拘束サレテイル、愛スル美々社長ガ、危害ヲ受ケルノヲ、怖レテイルノデス」

「それで探っているんでしょうけどさ、完全に変な動きじゃん。

だいたい拘束ってほんとうなの。

証拠はあるの。

何か要求とかはないの」

郷田はたてつづけに聞いた。

美々のことなら、お得意さんである母親の岬奈々の手前もあり、黙ってはられない。

「西園寺サンカラ、美々社長へノ、手紙トカ、メールトカ、プレゼントガ、イッパイ見ツカッタ」

「ふうん、それで西園寺さんを疑っているわけね。

つまり、老いらくの恋ってわけね。

そんなら、危害なんか与えられていないわよ。

美々ちゃんはいま、天国みたいな美しい座敷牢で、安楽椅子に揺られているわ。

あたしも誘拐されてみたいなー」

「セッカクデスカラ、探ッテモラエマセンカ」

「ううむ、スパイ探偵か、悪くはないわね。

でもさ、疑問ありよん。

もし西園寺さんが、美々ちゃんをホントに誘拐したんなら、あたしに依頼するかしら。

クローンやロボットに尾けられ、ドローンに見張られているってことが、自分が犯してる罪のためだと、莫迦でもわかるでしょ。

それとも、罪を犯している自覚がないのかしらん」

「ナルホド」

「まあいいわ。

どっちの依頼も受けて、どっちからも謝礼金をもらえば、一石二鳥、一挙両得、文句なしよん」

二〇三一年、二月二十五日、午後四時。

郷田狂介はまだ西園寺金時邸の前にいる。

「川上さんに安心するよう云ってちょうだい。

美々ちゃんは、あたしが救いだすわ。

だからもう探るのは、やめてってね」

そう云って、タナカを帰した。

帰した後も、しばし思案していたが、案ずるより産むが易しと、変装はやめることとして、BMWのなかに入り、早変わり着替えると、西園寺金時邸内に入って行った。

防犯カメラでチェックしていたのだろう、チャイムを押す前に、西園寺金時が玄

関に出迎えた。

「これはこれは、郷田先生。

わざわざすまんことですよ
変装のままでよろしかったがの」

「とにかく西園寺さん。

半分は解決しましたから、報告かたがた」

「さすがは、郷田先生。

わしは信用しておりましたがの。

それにしても早い対応で、おそれいりやのなんとかですよ」

「詳しくは探偵秘密でいえませんが、もうクローンやロボットに尾けられ、ドローンに見張られるなんてことは、決してないわ」

「それが半分ですかの。

して、残りの半分は何ですかのう」

郷田は首をふりふり、

「それは、中に入らせてもらってから、ゆっくりとね。

それとも、なにかご都合のわるいことでもあるのかしらん」

西園寺も首をふりふり、

「とんでもねえですがの。

郷田先生とちがって、わしには金輪際、東西南北秘密というものがありませんがの」

「でもね、北北西が怪しいわよ」

冗談めく郷田を、西園寺はシャンデリアが輝く応接室に招き入れた。

「郷田先生はコーヒーは好きですかのう。

ジンバブエから直接取り寄せた、ええコーヒーがあるんですがの」

「コーヒーも好きだし、ケーキも好きね」

「こりゃまた遠慮がない。

郷田先生はわしの理想の性格ですがの。

ケーキはあいにくですが、スイスから直接取り寄せた、ええクッキーがあります
がの」

「それでけっこうよ。

でも、探偵報酬は別。

後日、請求書を送るわ」

「とうぜんですがの」

西園寺が指を鳴らすと、秘書らしきモデル風双子美人が出てきた。

暖房がゆきとどいているためか、双子美人はミニスカートだった。

西園寺はコーヒーとクッキーを用意するよう命じた。

秘書というよりも、召し使いに命じる口調だった。

郷田は秘書らしきモデル風双子美人の後ろ姿を眺めながら、西園寺にカマをかけた。

「西園寺さんは、ああいうイヤらしいタイプがお好きなの。

それとも、いまや湘南一の美女とうたわれる、未来計画カンパニーの美々社長みたいなの」

「はっは、郷田先生もご冗談がお好きで。

わしがもし美々社長をお好きでも、どうにもなりません」

「誘拐して監禁すれば、どうにかなるわよ」

郷田の台詞に、西園寺の顔色が変わった。

郷田はそれを見逃さなかった。

西園寺はまた指を鳴らして、

「コーヒーとクッキーはまだかのう」

郷田は西園寺に詰め寄った。

「ごまかしたって駄目。

美々ちゃんはどこよ。

白状しないと、ロボットに襲わせるわよ」

「はてさて、そういわれても」

西園寺はとぼけ顔だった。

郷田は声を荒げ、

「さっさと出しなさいよ」

「舌と金なら、すぐ出ます」

郷田はさらに声を荒げ、

「あたしが元フライ級世界チャンピオンだってこと、知らないわよね。

わたしが本気出したら、その豪勢な入れ歯だって真っ二つよ」

そのとき二階から声がした。

「あら、郷田先生、来てらっしゃるの」

見上げると、螺旋階段の上の手すりから、岬美々の美顔がのぞいている。

「美々ちゃんったら、来てらっしゃるのじゃないわよ。

座敷牢で拘束されている、あんたを救いに来たんじゃないの」

美々は微かに笑いながら、

「座敷牢とか拘束って、どういうことかしら。

西園寺さん、説明して下さるかしら」

西園寺は苦笑し、頭をかきかき、

「いやはや、面目ないです」

郷田先生は、わしの依頼でお出でなすったんです」

(なるほどね、やっぱりね)

郷田には、だいたいの事情が呑み込めた。

郷田は指を鳴らし、

「コーヒーとクッキー、美々ちゃんの分もよろしくね」

コーヒーとクッキーを前にした、美々の具体的で概略的な説明はこうであった。

新生・未来計画カンパニーのために、資金提供者の西園寺と新しい計画を練っている。

副社長の川上やロボットたちにも、秘密裏に進めている。

西園寺邸二階の奥の一室は、十日間の予定で、現在美々の臨時オフィスになっている。

「そんな勝手なことして。

それじゃあ、川上さんも心配するわけよ。

せめて川上さんだけには知らせておかないと」

郷田が責めると、美々はくすりと笑って、

「敵を欺くには、まずは味方からっていいいますでしょ」

郷田は納得がいかず、

「愛は欺かないことよ」

美々はまたくすりと笑って、

「愛、愛だなんて、

郷田先生は、わたしがそんな目に見えないものを、信じているとおっしゃるのね」

「おっしゃるわよ」

「目に見えないものを信じていては、社長業はできませんわ。

川上宙門は麻暮正作先生のお師匠に感化されて、目に見えないものを信じちゃっていますの。

だから、新生・未来計画カンパニーのわたしの相棒は、西園寺金時さんに決めましたの」

郷田はまだ納得がいかず、

「どんなものを信じちゃっているの」

「愛と誠、義理と人情と友情。

それに、まったく信じられないんですけど、あの世とか幽霊とか魂とかですわ」

「それって、普通じゃなあい」

郷田は普通に云った。

「普通じゃないんですの。

川上宙門は、麻暮正作先生の魂の声を聞いたり、荒野大三郎曾祖父の幽霊をよく見るって云うんですの」

郷田は鼻を鳴らし、

「あたしだって、夢くらい見るわよ」

美々はもう応えずに、クッキーをつまんだ。

西園寺が飲んでいたコーヒーカップを置いて、

「とにかく、郷田先生、一件落着ということでのう」

「落着なんかしていないわよ」

郷田はコーヒーにもクッキーにも手をつけていなかった。

「しておりませんかもう」

「してないわ。

その新生・未来計画カンパニーってなにさ。
新しい計画ってなにさ。
美々ちゃんのお好きな、目に見える形で説明してくんないかな」
「それは、企業秘密ですがの。
探偵業も、秘密は大切でしょうがの」
「さっき、西園寺さんったら、わたしには金輪際、東西南北秘密というものがありますが、とかなんとか云ったでしょうよ」
「いやはや、嘘も方便、秘密がないと云うのも秘密のうちでしてのう」
「まあいいわ。
いずれその新しい計画とやらも、探ってやるわ。
川上さんがあたしに、依頼してくればの話だけどさ」
「失礼ながら川上さんは、美々社長には逆らえないと思いたすのがの」
西園寺の言葉に、美々はまったくすりと笑った。
郷田は癪にさわったが、堪えて、
「もうあたしの仕事は済んだってことか。
なら、あとで請求書を送るからよろしくね」
「その必要はありませんがの。
さっき双子の秘書に、解決料として一千万振込ませましたがのう」
郷田は、
(しめしめ、ほくほく)
と思いながらも、
「あんがいケチなのね。
以前パーティで、一億くらいは紙切れ同然、てなこと云ってなかったかしら」
「たしかに口走りましたがのう。
しかし紙切れだって、ラブレター書けますからのう。
郷田先生にラブレターは書きたくないから、紙切れ以下ということでご勘弁」
「ふん」
と鼻を鳴らして、郷田は西園寺邸を後にした。

二〇三一年、二月二十五日、午後六時半。

郷田狂介は未来計画カンパニーの応接室にいる。
すでに暗くなっていて雪も降り出しそうであったが、葉山の西園寺邸からBMWを飛ばし、江ノ島までやってきたのだ。
現在の未来計画カンパニーは、急拵えのプレハブ三階建てで、応接室は一階にあった。
簡素な一室の、氷で作られたのかと勘違いしそうな、パイプの折り畳み椅子に坐

った郷田は、荒野大三郎の時代の高層ビルを懐かしんだ。

しかしすぐにその思いを払って、暖房も省エネになっているこの建物の方が、健全なのではないかとも感じた。

川上宙門は、すぐに地階からあがって来た。

見るからに粗末なジャンパーを着ていた。

「これはこれは郷田先生、わざわざすみません。

あらましはタナカから聞きましたが」

「うん、それで報告に来たのよ。

あれから西園寺邸に入ったんだけど、美々ちゃんは、あそこの二階にいたわ。

でも、誘拐とか拘束とかではなくて、美々ちゃん自ら行ったのよ。

詳しいことは云ってくれなかったけど、あそこでせっせと仕事してるらしいわ。

新生・未来計画カンパニーのための、新しい計画とやらを練っているんですってさ」

川上の顔に、安堵と失望の色が同時に浮かんだ。

「では、未来の未来計画カンパニーのために、ぼくは必要ないということですか」

郷田は身を乗り出して川上の肩を優しくたたき、

「がっかりする必要はないってことよ。

あたしはさあ、その新しい計画ってのに、妙にひっかかっているの。

鯛の骨が喉にひっかかったみたいにさ」

「はあ、どっちにしても、必要ない」

川上は溜息をついた。

やはり相当にがっかりしている。

郷田は励ます口調で、

「なにさ、その腐った鯛みたいな顔は。

川上宙門、腐っても鯛よ。

いまこそ、川上さんの出番じゃないの。

その新しい計画の正体を掴んで、ぜひとも、あたしに教えてほしいのよ」

「はあ、このぼくがですか」

「あんたしかいないじゃない。

あんたが本当に美々ちゃんを愛しているなら、愛する美々ちゃんに、ポスト荒野大人になってほしくはないでしょうよ」

「そういう大それた計画なんでしょうか」

「大か小か、それをあんたが探り出すか、聞き出すかするのよ。

もし聞き出せたら、きっと美々ちゃんは、企業秘密だから口外するなというでしょうが、あたしにだけは教えてね」

「大それた計画なんでしょうか」

もう一度、川上は聞いた。

「あたしは探偵のカンで、怪しいとにらんでいるの。

その新しい計画の相棒に、美々ちゃんは川上さんではなく、西園寺を選んだのよ。

噂で聞いているでしょうけど、西園寺金時は金権主義者のぬらりひょんよ。金儲けのためなら、ナチスがやったユダヤ人の大量虐殺みたいなことだって、やりかねないんだから」

「それで、ポスト荒野社長ですか。

しかし、荒野社長は金儲けなんて眼中にありませんでしたよ」

「それはそう見せなかつただけ。

荒野大人は西園寺みたいに、オープンカーに乗って喜んでいるタイプじゃないもの。

でもさ、それも演技かもしれないわ。

川上さん、よく考えてごらんなさいよ。

巨大な資金なくして、巨大な悪行は成し得ないということ」

「それはそうですが」

「とにかく、温かいお茶を一杯」

郷田は自分も落ち着くために、一息入れようとした。

「気づきませんで、すみません。

インスタントでよろしいでしょうか」

川上は部屋の隅の小さなキッチンに行くと、すぐに駄菓子を添えて、ホットコーヒーを出して来た。

ジンバブエのコーヒーもスイスのクッキーも、手をつけなかった郷田は、駄菓子をつまんでインスタントコーヒーを口に含んだ。

「これは美味しい。

あたしはさあ、川上さん。

麻暮さんが亡くなってから、いえ消えてから、あの犬先生の生き方がなんとなく解ってきたのね。

麻暮さんは自分の贅沢のためとか、起業をするためとかで、お金を集めたことがなかったのよ。

それはまったく、一般常識からはずれていたわ。

一般人は、外国旅行したいとか、高級車を購入したいとか、家を建てたいとか、会社を起こしたいとか、そういうことで金を稼ぐのよね。

あたしだって一般常識の徒だから、そういう次元で必死に探偵稼業をやってきたわ。

けれども、麻暮さんはそういう次元に在たことがない。

不思議だったけれど、最近になってそれが、ちっとも不思議ではなくなった。

もし荒野大人と麻暮さんとのちがいがあるとしたなら、その一番大きなことは、黄金仮面と鉄仮面のちがいのよ」

川上は溜息をついて、

「たしかにそうですね。

しかし、郷田先生は何よりも、ぼくに何かをいいたいのですね」

郷田は手を打って、

「さすがに呑み込みが早い。

あたしはさあ、このシンプルな建物で、川上さんと共に、地道にやっっていく、そんな美々ちゃんを見たいのよ」

川上はつと涙ぐみ、

「郷田先生、ありがとうございます。

よく解りました。

ぼくに命じられたその役目、しっかりとやらさせて戴きます」

「命じたんじゃないで、お願いしただけ。

でもそれは、あたしのためじゃなくて、むかしから自分の子供同然に可愛がってきた、美々ちゃんのため」

「はい、ぼくも美々社長のために」

川上は郷田の手をとった。

「対策会議を開こうかしら」

郷田の提案に首を振った川上は、

「タナカの配下として予定している、ナカタというロボットがいます。

AI搭載の最新ロボットです」

「AIって、ETとはちがうわよね」

「アーティフィシャル・インテリジェンス、つまり人工知能ロボット。

しかもナカタは、相手の頭の中まで読めてしまうのです。

稼動前ですから、美々社長には、まだ報告していないロボットです。

ぼくはこのナカタと行動を共にします。

郷田先生は、ぼくからの報告を待っていてください。

そう長くはお待たせしないはずです」

郷田は川上のやる気を信じた。

二〇三一年、二月二十六日、午前三時。

郷田狂介は、自邸の寝室で横になっている。

なかなか寝付かれずに、スタンドライトは付けたまま。

枕元に置いてある愛読書の、

『西行物語絵巻』

を開いたが、いつもの睡魔はやってはこない。

郷田は西行を思い、自分の少年時代を想った。

郷田少年は、周りから「神童」と呼ばれていた。

学問優秀スポーツ万能で、学問では国語が、スポーツでは剣道がかくべつ得意だった。

しかしそのころから郷田少年は、自分の性癖に気づいていた。

カミングアウトする勇気なんかない郷田少年は、あるとき西行の存在を知り、自分も家族を捨てて出家したいと考えたものだった。

武芸の達人だった「北面の武士」佐藤義清の出家は、いつのまにか郷田少年の理想の姿に映っていた。

郷田少年は、『西行物語絵巻』に書いてある、西行出家の日の様子を何度も読み返したものだ。

【此の暮れの出家、障り無く遂げさせ給へと三宝に祈請申して、宿へ帰り行く程に、年比堪え難く愛おしかりし四歳なる女子、縁に出で迎ひて、父の来たるが嬉しさよとて、袖身に取り付きたるを、類無く愛おしく、目も呉れて覚えけれども、此こそは煩惱の絆を切ると思ひて、縁より下へ、蹴落としたりければ、泣き悲しみけれども、耳にも聞き入れずして中に入りぬ】

そして同時に、西行のこんな歌もくちずさむようになっていた。

【世を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨てつるなりけれ】

ところが、ある日、強盗によって両親が殺された。

そのとき、号泣した郷田少年の胸に去来したのも西行の歌であった。

【歎けとて月やはものを思はするかこちがほなるわが涙かな】

警察の捜査は難航し、耐え難きを耐えた郷田少年は、出家の望みを断ち切って、探偵になることを決心した。

犯人は郷田少年より二つだけ年上の少年で、逮捕直前に自殺した。

その後、郷田青年は、探偵になったときにも、西行の歌を思った。

【年たけて又越ゆべしと思ひきや命成りけり佐夜の中山】

この「命成りけり」という一語が、郷田青年の心情と重なったのである。

また、郷田中年にとって、麻暮正作への敬愛の念となったのである。

二〇三一年、二月二十六日、午前四時。

麗子と蝶子が寝ているはずの部屋から、凄まじい叫び声がして、まだ眠っていな

かった郷田は、すかさずベッドから飛び下りて、ふたりの部屋に飛び込んだ。

トラウマがあった郷田は、強盗かと思ったのだが、ふたり同時にお腹を抱えて叫んでいるので、

「陣痛なのー」

と聞くと、ふたり同時に頷いた。

「十日も早いじゃん」

と不服を云いながらも、郷田はすぐに救急車を呼んだ。

ふたりは激痛に苦しみながらも、着替えをしようとしたが、郷田は、

「そんな必要はないわ」

と止めた。

マタニティ・パジャマの方がかえっていいと踏んだのだ。

ただ、下着を中心に、ふたりの着替えをスーツケースに押し込んだ。

救急車が来て麗子と蝶子は運ばれ、郷田はBMWで救急車の後を追った。

(いやはや)

と郷田は溜息をついた。

(三・一一も不安だけど、二・二六も不安だわね)

二〇三一年、二月二十六日、午前十時。

川上宙門は、西園寺金時邸の門前にいる。

その横に、AIロボットのナカタがいる。

川上は、麻暮正作の師、陽羅義光から云われた言葉を思い起こしていた。

『よいか、川上。

お前はいつまで、荒野の奴隷、荒野の傀儡、荒野の太鼓持ち、荒野の糞拭きになっているつもりなのだ。

お前は天才的な科学者だ。

荒野よりも優れた能力を持つ者じゃ。

よいか、川上。

なぜにお前は、宙門なのか。

お前の父、川上宙衛門が、宙の一字を授けたのみの話ではないぞ。

愛息のお前に、宇宙を拓く門たる存在になってほしい一心で、宙門と名づけたのじゃ。

地球を壊滅させる陰謀の片棒担ぎ、肥やしの片棒担ぎになってもらいたかったわけではない。

よいか、川上。

いまこそ、父の遺志を継いで、地球を、宇宙を救うのじゃ』

西園寺金時が、ぬらりひょんと出て来た。

岬美々もその後から出て来た。

「そろそろ来るころかと待っていましたがの。

今日は天気もいいし、あんまり寒くもないので、庭でもご案内しようと思いましたがな」

西園寺はみんなを促して、芝生の庭を横切り、石畳を踏んで、奥の東屋へ案内した。

石畳の両脇には池があって、多数の鯉が泳いでいた。

池の周りで、土佐犬とまちがえられそうなほどの、黒猫が巨体を揺らしていた。コールタールを塗り付けた色だったが、瞳だけは金色に輝いていた。

みんながそれぞれの位置に坐ると、西園寺はおもむろに葉巻に火をつけた。

「ここからは、わしはオブザーバーです。

美々社長と川上副社長とで、腹をわって話をしてくれればありがたいがの」

「願ったり叶ったりです」

川上は素直に応じた。

美々がなかなか口を開かないので、川上はやはり素直に聞いた。

「拉致されたわけではないことを、郷田先生にお聞きして安堵しましたが、何か新しい計画を練っているとのこと。

企業秘密なのではと思いますが、企業の一員であるぼくにも、その計画を教えてもらえませんか」

美々はまだ躊躇っていたが、美々にとってすでに他人ではない川上の素直な問いに、口を開かざるを得なかった。

「具体的には云えないわ。

というより、まだ具体的計画は練れていないのよ。

ただ、川上さんにはいずれ話すつもりではいたの。

西園寺さんの支援が約束されてからね。

昨日、西園寺さんの支援が約束されたので、こうして姿を現わしたってわけ。

計画のアバウトだけ報告するわ」

「ありがとうございます」

川上は耳をそばだて、ナカタは頭脳をうごめかせた。

「アバウトのアバウトかもしれないけど、キャッチフレーズだけはできているの。

それは」

美々はくちごもって、西園寺を上目遣いに見た。

西園寺が小さく頷いた。

『美波／美島計画』

『三波・三島計画』ですか」

「いえ、『美波／美島計画』

美々はセンターテーブルに、指先で漢字を書いてみせた。

『美波／美島計画』ですか。

それって、どういう意味ですか」

「意味っていわれても、まだそういうキャッチフレーズしかできていないのよ」

美々はいささか苛ついた声を出した。

川上は美々の苛つきが収まるのを待ってから、

「西園寺さんは、キャッチフレーズだけで支援を約束してくれたのですか。

それとも」

川上は美々と西園寺をかわるがわる見た。

西園寺は微笑を漏らしただけで何も云わなかった。

代わりに美々が、

「そうよ、何か問題とか疑問とかあるの」

川上は、

(問題も疑問も大ありだ)

と思ったが、そうは云えず、

「西園寺さんのお言葉を、直接お聞きしたいのですが。

もちろん、オブザーバーとしてのお言葉でかまいません」

西園寺はまた微笑を漏らし、郷田が「ぬらりひょん」と形容した巨大な禿頭を揺らすと、

「わしは、郷土愛の極めて強い人間でしてのう。

美波・美島、美しい波、美しい島。

湘南をこよなく愛する者にとって、美しい波と美しい島はエルドラドですがの。

キャッチフレーズであれコンセプトであれポリシーであれ、この言葉には惚れずにおれませんかな。

以上でご納得いただけましたかのう」

(納得できるわけがない。

金権主義者の台詞とはとても思われぬ)

と川上は思ったが、これ以上の情報收拾は無理だと考え、

「納得しました」

と云って、頭を下げた。

そして、ナカタの声をかけて立ち上がった。

「おかまいもせんで」

と西園寺が声をかけた。

「まだ当分戻れないから、会社のほうよろしくね」

と美々も声をかけた。

「了解しました」

と云って、川上は立ち去った。

二〇三一年、二月二十六日、正午。

川上宙門とナカタは、葉山の海岸にいる。
空は青かったが水平線は白く煙っていた。
海上には船も見えず、海岸には人も見えなかった。
冷たい砂の上にナカタと並んで坐った川上は、
(充分美しい波ではないか)
そして振り返り、
(充分美しい島ではないか)
と思った。
まったく意味が解らなかった川上は、ナカタの知恵を借りることにした。
「ねえ、ナカタ君、『美波／美島計画』ってどういうことかねえ」
ナカタは躊躇せずに、
「ボクノAIハ、既ニ答ヲ出シテイマス。
ソレハ、天地ガヒックリカエルクライ、恐ルベキ計画デス」
川上は思わず絶句し、
「天地が」
「ハイ。
美シイ波トハ、津波ノコトデス。
美シイ島トハ、津波デ壊滅ナッタ、島ノ復興デス」
「具体的には」
川上は蒼ざめていた。
「僕ノ頭脳ノ答ハ、太平洋海底火山ノ大爆発ヲ、人工的ニ起コシ、ソノ津波ノ大被害ノ、総テニ対応シタ、復興事業会社ノ設立」
「ううう」
川上は言葉を失い、しばし頭を抱えた後に、郷田狂介にメールを送った。
そしてスマホ用GPSで、郷田の居場所を確認した。

二〇三一年、二月二十六日、午後一時。

郷田狂介は「湘南第一産婦人科」にいる。
それぞれの分娩室で、同時に産声があがった。
郷田は思わずバンザイをし、飛び上がりもした。
二〇三一年、二月二十六日、午後一時、麗子は女兒を産み、蝶子は男児を産んだ。

郷田は缶コーヒーを飲むために自動販売機の方に足を進め、そのとき川上宙門か

らのメールに気づいた。

郷田は赤ちゃんの顔を見たかったので、ここまで来てほしいとメールすると、もう向かっていますとすぐに返信があった。

二〇三一年、二月二十六日、午後二時。

郷田狂介と川上宙門は、「湘南第一産婦人科」敷地内の小さな庭園のベンチに腰掛けている。

昼下がりの芝生は、不気味なくらい明るく輝いていた。

郷田は目を窄めて芝生を見ながら、川上の話を聞き終えた。

「詳細は解ったわ。

西園寺金時の支援ってことだから、そんな結論に達する予感があったわ。

でも、スケールが半端じゃないわね。

やっぱり、美々ちゃんは荒野大人の曾孫ね」

郷田の感想に、川上は美々を庇った。

「美々社長は、西園寺氏に騙され、唆されているんです。

まちがいなく美々社長は、『美波／美島計画』の内実を知らなくて、万一の津波被害に備えた、予防対策事業、及び復興対策事業と捉えているはずです。

ぼくは、美々社長の性格も人柄もよく知っているつもりです。

ああ見えて、とても正義感と使命感の強い人なんです」

郷田は頷きながらも、

「美々ちゃんのごことは、川上さんよりあたしのほうがよく知っているかも。

おっしゃる通りだけれども、人間の心は変わるからねえ。

コロコロ変わるから、コロコロって云うのよ。

美々ちゃんもコロコロのお年頃ね」

「そんなこと云わないでください。

美々社長は、西園寺氏に誤魔化されているか洗脳されているんです。

郷田先生、とんでもないことになる前に、何とかしてください。

郷田先生、川上宙門、一生のお願いです」

郷田は、川上の涙ながらの懇願をはぐらかしたわけではないが、その前にいくつか疑問点があった。

「それにしてもAIってのは凄いもんね。

その凄さを、西園寺も美々ちゃんも気づかなかったのかしら」

川上は郷田の疑問に即答した。

「それは、ふたりとも、ナカタがどんなロボットか知らないからです。

ナカタはぼくが実験的に開発したので、完成するまでは美々社長にも秘密にしていました。

あらかじめ報告して、後で失望されるのも、ぼくとしては耐えられないと考えたものですから。

まちがいなく、ふたりとも、ナカタはタナカと同じレベルのロボットと思っていたはずです。

「そうでなければ同席を拒んでいたはずですし」

「なるほどねえ。

それにしても、西園寺と美々ちゃんの関係って、どういうのかしら。

もし洗脳だとしても、洗脳されるだけの下地がないとねえ。

ナカタ君じゃなく、タナカが、美々ちゃん宛に西園寺のプレゼントがいっぱい届くって云っていたけど。

念のため、美々ママの奈々ちゃんに電話で聞いたんだけど、西園寺と美々の関係って、湘南の名士同志ってことぐらいしか」

郷田は川上の答を待った。

「ぼくが美々社長から、直接聞いたことがあります。

それはもう一年前でしたから、失念していましたけれど。

西園寺氏の著書に、とても感銘を受けたって云っていました。

それできっと西園寺氏に対して、メールとか手紙とかプレゼントとか送ったんですね。

だから、美々社長宛に届く西園寺氏のものは、みんないわゆるお返しというか。

これは昨日再確認して解ったことなんですけど」

郷田は、さかんに頷いて見せた。

郷田は、だんだんといつもの自信過剰の表情や態度に変わって行き、川上は頼もしそうに、そんな探偵の様子を見た。

「ふんふん、だいぶ読めてきたわ。

西園寺の著書って、あの悪名高き『金権論』か。

〈日本が誇る大思想家、朝山完吉博士の、『暗殺論』に触発されて書いた〉云々って、序文にあったわよね。

あたしも流し読みしたけど、朝山完吉先生の真似をしているのは文体だけで、内容は月とスッポン。

スッポンのぬらりひよんが、あの本で、みっともないくらいに、主張し、恥も外聞もなく、強調しているのは、〈金は正義なり〉よね。

思い出してみれば、西園寺はそのことしか云っていない。

美々ちゃんは、あの言葉にイカレたのね」

「そんな言い方しないでください」

川上は泣き出しそうな顔になった。

「あたしだって、云いたくはないよ。

でもさあ、荒野大人の血かな」

「そんな言い方しないでください」

川上は益々泣き出しそうな顔になった。

「美々ちゃんが、スッポンぬらりひょんに洗脳された、というよりもさあ、美々ちゃんが、スッポンぬらりひょんをかどわかしたんじゃないのお」

「そんな言い方しないでください」

「泣くんじゃないの。」

このあたしが、きっちり始末をつけてあげるからさあ」

郷田は、両腕を交差させて、胸の前で×を作った。

「始末なんかつけていただかなくても。」

美々社長を元の美々社長にしていだければ」

川上は、胸の前で両手を合わせた。

「高いわよお。」

あたしだって、金権主義者だからね」

「報酬は、会社を売ってでもお支払いいたします」

「冗談よ。」

でも、ここらで、荒野大人の血を塞ぎ止めないとね」

郷田と川上は、しばらく小さな庭園を眺めていた。

そのふたりの足元に、一羽の子雀が迷いこんで来た。

川上は優しく微笑んで、

「無事に産まれたんですね」

郷田は父親みたいな顔になって、

「そうなのよ。」

こんにちは、赤ちゃん。

まるで、天使のような顔の女の子と、まるで、悪魔のような顔の男の子と。

チャーリーズエンジェルと、エレファントマン。

一十一＝三になるか、一十一＝〇になるか」

「蝶子さんの赤ちゃんが、悪魔のよう、ですか」

「血は争えないっていうもの。」

でも、ここで本当に、荒野大人の血を塞ぎ止めないと」

郷田の眼の光に、残酷さを見た川上は、震える声で、

「まさか、蝶子さんの赤ちゃんを抹殺するなんて」

「なんて、ことは、ないわよ。」

いくら見た目が悪魔でも、〈デビルフェイス／エンジェルハート〉ってこともあるし、いくら見た目が天使でも、〈エンジェルフェイス／デビルハート〉ってこともあるからね」

「はい、はい。」

ぼくは、ふたりの赤ちゃんともに、〈エンジェルフェイス／エンジェルハート〉になると信じます。

美容整形手術も進歩していますから、何も心配ありませんよ」

「そうよね」

と云って、郷田は子雀に手を延ばした。
子雀は驚いて、小走りに走ってから、ぎこちなく飛び立った。

二〇三一年、二月二十六日、午後三時。

郷田狂介と川上宙門は、まだ「湘南第一産婦人科」敷地内の小さな庭園のベンチに腰掛けている。

しばらく沈思黙考していた郷田が口を開く。

「荒野大人と麻暮さんの最期なんだけどね。

川上さんに詳しく聞きたいんだけどさあ」

川上は困惑の表情になって、

「以前お話した以上のことはないんです。

とにかく、麻暮先生がやって来ると、ぼくに出て行けと云い、荒野社長も頷くので、ぼくは未来計画カンパニーの、かろうじて崩壊を免れている地階から出て行きました。

その後、物凄い爆発音がして、地階も壊滅しました。

湘南のレスキュー隊を中心に捜索が行なわれましたが、遺体らしきものは見つかりませんでした。

けれども、あちこちに血液反応はあったそうです。

人体は完全に粉微塵になったとしか思われぬ、との責任者の報告がありました。

またその後、美々社長と相談して、当地の埋め立てを行ないました。

その上に、あのプレハブを建てたのです。

本当にそれだけです」

川上が郷田を上目遣いで視た。

郷田は念押しをする。

「ホントにそれだけなの。

たとえば、瓦礫の中から血塗れの荒野大人が、ぬらりひょんと出て来くるのを見たとか」

「あの爆発で、助かる人間がいるとは思われません」

川上は真剣な表情で云った。

「でも、なにせ、ふたりとも不死鳥だからねえ。

もしかすると、ふたりとも人間じゃないかもしれない」

「それはぼくも認めますが、それこそ妖怪の親玉にでも変貌しないと、この世には再び現れることはできないでしょう」

「だからさあ。

荒野大人は、ぬらりひょんになっちゃったんじゃないの」

郷田はしつこい。

「まさか、まさか」

「麻暮さんの話ではね、荒野大人はかつて、政界のドン、松本玄信であり、美術界の巨匠、北山極斎であり、〈愛信会〉の教祖、日下典禅だったっていうじゃない。

ぬらりひよんの西園寺金時が、荒野大人だったとしても、あたしは驚かないけどさ」

「まさか、まさか」

川上は戸惑った顔になった。

「あたしも、まさかとは思っているんだけどさ。

ただ、まさかの可能性はゼロじゃないからさ」

「万一、荒野大人がぬらりひよんだとして、まさか麻暮先生はゲゲゲの鬼太郎だなんていうんじゃないでしょうね」

川上はふざけたわけではない。

「おや、川上さんったら、すこし気分が落ち着いてきたようね。

けっこう毛だらけ、猫灰だらけ、西園寺邸にでっかい化け猫がいたでしょう。

あれかも、あれが麻暮さんかも。

もしも荒野大人がぬらりひよんに化けたのなら、麻暮さんが化け猫になっても、何の不思議もないわ」

「まさか、まさか」

「まさか、ですけどね。

そのまさかを、さかさまにするのが、あのおふたりなのよ

あのおふたりは、あたしに云わせれば、一葉の葉っぱの裏表ね。

とにかく、百発百中のあたしのカンでは、あのおふたりは、死んでなんかいないわ

まるで生きている死霊だもの」

「とにかく」

「そう、とにかく、あたしにまかせて。

ちょっと考えがあるのよ」

郷田がにやりと笑うと、川上にもようやく笑顔が出た。

自信家の郷田は、それでも川上にこう伝えるのを忘れなかった。

「万一あたしが行方不明になったら、川上さんはあたしを探すことなんかしないで。そんなことをしても、同じ穴の貉か、池の周りをうろつく化け猫にされるだけだから。

万一の場合は、なによりも麻暮さんを探してね」

「よく解りました。

会社のビルは崩壊しても、金庫は崩壊していませんから、依頼料は郷田先生のいい値で結構です」

郷田は川上の肩に優しく手をおいて、

「無事に帰って来れる保証はないから、それは要らないわ。

でも麻暮さんを発見できたら、依頼料は麻暮さんに払って頂戴ね」

二〇三一年、二月二十六日、午後四時。

郷田は、ベッドに戻っている麗子のところにいる。

郷田は笑いながら、

「可愛い女の子じゃないの。

麻暮さんとあんたの子とは思えないわね」

麗子も笑いながら、

「郷田さんったら失礼ね。

トンビがタカを産むことだってあるんだから、ブスがテンシを産むことだってあるわ」

「麻暮さんに見せたいわね」

「天国で見てくれているわ」

郷田は麗子の耳元で囁く。

「麻暮さんは天国なんか信じない人よ。

だからまだ、地上にいるはず」

「信じていいの」

麗子の顔が紅潮した。

「あたしのカンだけどさ。

あたしのカンの確立は九割」

麗子は郷田を見て、涙ぐむ。

「さて、こんどはお蝶さんのとこだけど、行きにくいわ」

「どうして。

差別はだめよ」

郷田は実に云いにくそうに、

「でもさあ、天使のママには会いやすいけど、悪魔のママには会いにくいわねえ」

「それって、どういう意味なの」

麗子もすぐには意味が解らない。

「言葉そのままよ。

お蝶さんが産んだ男の子は、具体的にはあれだけど、正直云って悪魔の顔ね」

(西園寺がぬらりひょんなら、あの子は酒吞童子かな)

郷田はむろん、そんなことは口にしなかった。

「でも、お蝶さんは美人だし、荒野さんも若い頃は美男子だったっていうじゃない」

「だからさあ、タカがトンビを産むこともあるのよ」

麗子は押し黙った。

「でもさあ、美容整形手術も進歩しているから、何も心配はないわよ。

とにかくベビー誕生は、人間の至福、宇宙の神秘ね」

郷田は川上の受け売りも使って、麗子を慰めた。
それでも郷田は、
(生まれるってことは、死ぬってことを連想する)
と思った。
そして、空海の言葉までが浮かんだ。

【生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く
死に死に死に死に死んで死の終りに冥し】

しばらくしてから、郷田が蝶子のベッドに顔を出すと、蝶子は泣き顔だった。
「なにさ、その顔。
せっかくの美人が、だいなしじゃない」
「赤ちゃん見たでしょ」
蝶子は郷田に縫る眼をした。
郷田は、わざと明るく、
「もちろん、見させてもらったわよ。
あのさあ、あたしは女じゃないから、偉そうには云えないけどさ、赤ちゃんは物
心つくまで、二度三度と顔が変わるって云うじゃない。
あと三年も立ったら、可愛くて女の子とまちがわれるかも」
「荒野さんが亡くなっていて、よかったかも。
これがあなたの子よ、なんて、自慢げに云えないもの」
「荒野大人は亡くなってなんかないわ、というのが、あたしの見解。
でも、もし、荒野大人がここにやってきたなら、堂々と見せびらかすがいいわ。
たとえ、どんなに醜くても、どんな障害があっても、自分の子は、だれだって可
愛いものよ。
それが、親心。
いえ、可愛がらないといけないのよ。
あたしは親じゃないけど、麗子も蝶子も娘みたいに可愛いから、女の子も男の子
も、爺ちゃんとして可愛がるわね」
「ありがとう。
でも、ずいぶん若い爺ちゃんね」
「若いんじゃないわ、若づくり。
これも探偵の変装のひとつよ」
郷田が笑うと、蝶子もようやく微笑んだ。

二〇三一年、二月二十七日、午前十時。

郷田狂介は、西園寺金時邸の前にいる。

黒いマントをはおり、鉄仮面をかぶっている。

そう、麻暮正作に変装をしているのだ。

昨夜はずっと、麻暮の声色を真似ていたので、喉がだいぶかすれている。

それがかえって効果的で、自信満々だった。

防犯カメラや監視ビデオにむかって、ピースサインまでしてみせた郷田は、やや猫背でやや片足をひきずって歩く麻暮の体型模写までやりながら、西園寺金時邸の庭に入って行った。

ぬらりひょんという感じで、西園寺金時が出て来た。

岬美々もその後から出て来た。

「そろそろ顔を出されるころかと、待っていましたがの。

今日は天気もいいし、あんまり寒くもないので、庭でもご案内しようと思いましたがな」

西園寺は、川上宙門に対する台詞と同じことを云った。

それからひとこと付け足した。

「麻暮先生が亡くなったなんてこと、わしはちっとも信じてはおりませんでしたかの」

(おっと、変装はうまくいったようだわ)

郷田は一安心して、

「ケケケ」

と笑ってから、

「ボクは西行が好きでしてね。

あんな寒い日には死ねませんよ。

【願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ】」

西園寺は郷田を促して、芝生の庭を横切り、石畳を踏んで、奥の東屋へ案内した。

石畳の両脇には池があって、多数の鯉が泳いでいた。

池の周りで、土佐犬とまちがえられそうなほどの、三毛猫が巨体を揺らしていた。

それぞれに東屋の椅子に腰をかけると、西園寺がこう切り出した。

「わしはのう、麻暮先生、この猫を見るたびに、この中に麻暮先生がおるんじゃないかと、思ったもんですがの」 「ケケケ、ボクもあの化け猫に化けようかと思っただけでございますよ。

西園寺さんを監視するためにね」

「西園寺さんは、麻暮先生をよくごぞんじでしたのね」

美々が口をはさんだ。

「ごぞんじもなにも、美々社長の曾祖父の荒野前社長に、友達に持つなら麻暮先生ですよと、わしは何度云われたかわかりませんがの」

「ケケケ、荒野がそんなこと云うとは、ボクには信じられませんかね」

郷田が皮肉っぽく云うと、西園寺は首をふりふり、

「むろん、荒野前社長と麻暮先生は犬猿の仲だと、わしだって知っておりますがな。
だから、そう云われても、荒野社長の手前、なかなかその言葉通りに実行はできませんでしたがの」

郷田は早く決着をつけたかった。

「ホントに西園寺さんは、荒野とそんな話をしたんですかねえ。

同じ人物同志が話をするってことは、頭の中で自問自答するってことですかね。

ケケッ」

西園寺は鼻白み、美々と同時にこうつぶやいた。

「意味が解りませんが」

「ケケケ。

そのまんまの意味よ。

つまり、西園寺金時、すなわち荒野大三郎」

「まさか」

と云ったのは、美々で、

「さすが」

と云ったのは、西園寺だった。

西園寺は潔く、巨きな頭に手をやると、首から上をいっぺんに剥がして、池の面に放り投げた。

現われたのは黄金仮面だった。

美々は息をのみ、郷田は満足げに頷いた。

「サスガハ、麻暮サン。

アナタノ眼ハ、ゴマカセマセンネエ」

まちがいなく荒野大三郎の声だ。

もはや、ぬらりひょんはどこにもいなかった。

郷田は鋭く立ち上がって、

「ボクの眼を誉めてくれたって、誤魔化せないよ。

ケケケ。

さあ、美々社長に対する、誤魔化しを白状しな」

荒野は、

「プフイ」

と鼻で笑ってから、

「麻暮サンノ偽者ニ、白状ナンカ、スルモノデスカ。

郷田サンモ、化ケノ皮ヲ剥イダラ、イカガデショウ」

荒野の言葉に、郷田も潔く鉄仮面をはずした。

美々が眼を丸くした。

「さすがは荒野大人。

あたしの変装なんて、やっぱりばれるわね」

郷田は苦笑した。

「イエイエ、最初ハビックリシマシタヨ。

ナゼッテ、ソロソロ麻暮サンガ、顔ヲ出スコロカト、戦々競々トシテオリマシタ。

デモ、西行ガ好キダト、云ッタノデ。

麻暮サンガ好キナノハ、藤原定家デスカラ。

プフイ、口ハ禍イノモトデスカネ」

「それは知らなかったわん。

日本人はみんな西行が好きだって、先入観があるのよん」

郷田は悔しがった。

「ソレデ、郷田先生、本日ハ何ノ御用デショウカ」

改まった口ぶりで荒野は云った。

郷田は気持を抑えて、

「さすがの荒野大人も知らないでしょうが、昨日お蝶さんに男の子が産まれましたよ」

「ソウデスカ、ソレハソレハ、ワザワザ有難ウゴザイマス。

コンナ歳ニナッテモ、胸ガ躍リマス」

演技かもしれなかったが、荒野は珍しく嬉しそうだった。

その様子に郷田は、赤ん坊の容貌に就いては告げなかった。

それでも皮肉のひとつくらいは云いたかった。

「美々ちゃんの、いや、荒野大人の、『美波／美島計画』が実行されれば、産まれたばかりのお子さんも、美波、つまり大津波の犠牲になるってわけね」

美々が慌てる様子で口をはさむ。

「郷田先生は勘違いをなさっているわ。

何もかも汚れてしまった、湘南の大活性化のために、一度湘南をゼロにするってことなの。

もちろん、津波の来襲は、事前に湘南一帯に伝えるわ。

安全第一、人命第一、地域第一」

郷田は苦笑して、

「相変わらず美々ちゃんは甘いわね。

荒野大人が、その程度のスケールで、満足するわけないじゃない。

『美波／美島計画』の美島って、荒野大人にとっては、湘南という地域に限定なんかされない、つまり日本列島ということよ。

だから当然、人工津波のスケールもそういうこと。

あたしの想定するところ、まあ助かるのは日本の人口の1%ってところかな」

幼いころから郷田に可愛がられ、郷田を信じている美々は、大声をあげた。

「まさか、本当なの」

隣の荒野を視ると、荒野は落ち着き払って、

「プフイ。

西園寺金時デハナク、荒野大三郎トナッタ今ハ、曾孫ニ嘘ハ云エマセン。

シカシ、美々が降リルトシテモ、私ノ全生涯ヲカケタ大計画デアル、『美波／美島計画』ハ実行サレネバナリマセン。

当分、本当ニ、拉致サセテモラワナイト」
「美々ちゃん、解ったでしょ、あんたの曾祖父は、世界一の悪魔よ。
悪魔よ、悪魔め」
郷田が叫ぶと、荒野は嘲笑い、
「数人殺シタラ、悪魔ノ殺人者、数千万人殺シタラ、世紀ノ英雄」
黄金の仮面の中で、口笛が吹かれた。
池の周りを静かにうろついていた、郷田いわく化け猫が、むささびさながら突如
空を飛ぶと、郷田と美々に次々と襲いかかり、身体の一部を噛んだ。
(麻暮さん、早く復活してよ)
そう思うのが精一杯の、郷田は昏倒した。
美々も瞬時に昏倒していた。
黄金仮面の哄笑が、辺りに木霊した。

第二部／第一章／第二項

これが道だ
そう口で云ったからってそれは本当の道ではない
老子

露の世は露の世ながらさりながら
小林一茶

私の得意ワザは死んだフリをすることです
禿光山人

善と同様悪にも英雄がいる
ラ・ロシュフコー

二〇三一年、三月三日、午前十時。

麗子と蝶子は昨日退院し、ベビーと一緒に郷田邸に帰宅している。
麗子の産んだ子は麻子と名付けられ、蝶子の産んだ子は大介と名付けられた。
「やっぱり郷田さんがいないと、寂しいわね」

キッチンに立った麗子がそれとなく云った。

「面会に来てくれたとき、仕事が入ってるって云っていたから、出張かもしれないね」

産後の肥立ちが悪い蝶子は、赤ん坊をあやしながらソファにいる。

「どちらにしろ郷田さんのことだもの、心配は要らないと思うわ」

麗子は郷田を麻暮同様の不死身と思っている。

というか、探偵はみんな不死身だと思っているのだ。

「心配はなくても、不便かな。」

郷田さんがいたら、いまごろ美味しいモーニングを戴いているとき」

蝶子が云うと、麗子は口をとんがらし、

「わたしのモーニング、美味しくなくて悪かったわね。 だいたいさ、私たち、郷田さんに甘え過ぎてきたわ」

「そうよ、傍から見たら、厭なふたりの妊婦。」

いまは忌々しいふたりのママ」

蝶子は自虐的になっている。

「傍はともかく、まだ真面目で平凡な学生やってるつもりの、親がなんと云うか。」

お蝶さんは、親なんかいないも同然だけど、わたしは箱入り娘だからね」

「両親に早く孫を見せてあげないと、すねて仕送りがなくなるかもよ」

「そういうことなら、わたしは麻暮さんが一生困らないお金を残してくれたから問題ないのよ。」

問題はお蝶さんのほうよね」

「それがさあ、半月ほど前に一度通帳を調べたんだけど、知らない相手から入金があるのよね。」

それも半端な金額ではないのよ」

「きっと荒野さんよ」

麗子が断固として云うと、蝶子は眼を輝かせ、

「生きているのかしら」

「いえ、生きているうちに、そういう配慮をしておいたってこと」

「どちらにしても、お互い旦那様には恵まれたってことね。」

それとお兄様にも、いえ、お姉様かな。

結局、郷田さんにおんぶにだっこの生活」

蝶子はやはり、自虐的な口ぶりで云った。

「ということは、もし郷田さんの不在が、郷田さんの身に何か起こったのだとしたら」

「起こったのだとしたら、わたしたちには郷田さんを救う義務があるってことね」

でも、と蝶子は思う。

(そんな力は、いまの私たちにはないわね)

それでも一応、蝶子は川上宙門にメールを入れた。

郷田が最近、川上の名を口にするが多かったからである。

【郷田さんがしばらく留守らしいの。何か心当たりはあるかしら】

川上からはすぐに、それにしては長い返信があった。
まるで用意していたかの文面。

【郷田先生は西園寺邸に行って行方不明です。スマホもGPSも繋がりません。おそらく美々社長と共に、西園寺氏に監禁されているのです。西園寺氏がもしかすると荒野大人ではないかと、郷田先生は考えています。万一郷田先生が行方不明になったら、決して探索などせずに、麻暮先生を見つけるよう郷田先生から云われています。はい、郷田先生は麻暮先生も生きてると信じています。実は僕はいまも、AIロボットのナカタと一緒に七里が浜に来ています。ここに新しくやってきたという漁師が、変わり者で腕が立つと、噂に聞いています。麻暮先生はかつて漁師だったことがあると、郷田先生から聞かされたことがあります。蝶子さんと麗子さんは、この件には関わらず、育児に集中してほしいとの伝言もあります。何か新しい情報が入ったら、必ず僕のほうからお伝えします】

蝶子は麗子に向かって平然と、
「荒野さんも麻暮さんも、生きているってさ」
つと麗子は調理の手を止めて、号泣し出した。

二〇三一年、三月三日、午前十時半。

川上宙門とナカタは、車を降りて、七里が浜の砂の上にいる。
波は静かで、微かな潮風が心地よい。
しかし季節柄彼らの他にはだれもない。
だれもないが、そこには人間の動きの名残りがあった。
ゴミは落ちていたし、ゴミは打ち上げられた。
それでも大掃除をするほどではなかった。
砂と波と風と、遠くの樹々と、それらが新しい夏の到来を待っていた。
ゴミすらも新しい仲間を待っているごとく、川上には感じられた。
(だが、新しい夏、新しい仲間は、本当にやってくるのだろうか)

蝶子に送ったメール通りであるが、蝶子と麗子は、この件には関わらず、育児に集中してほしい、との郷田の伝言だけは、川上が作ったものだった。

「どうかな」

川上は脳波を集中させているナカタに声をかけた。

ナカタは、何度か頷いた後で、
「川上サン、ズット先ニ、見窄ラシイ小屋ガアルデショウ。
アソコガ、新シクヤッテキタ、漁師ノ住マイデス。
イマ、人ノ気配ガシマスカラ、マダ漁ニハ出ズニ、本人ガ居ルハズデス」
「そうか」

と声をあげると、川上はナカタより先におもむろに歩き出した。
なかなか足が前に進まないのは、いまの川上の唯一の贅沢であるサンローランの靴のせいであった。

むろん、砂上での靴の履き心地のせいではなく、貧しい小屋と派手な靴とのギャップのせい、つまり川上の気持の問題であった。

西園寺邸に行ったときは、美々の好きなシャネルのオーデコロンをつけたが、いまは安物のコロンをつけている。

それすらも潮風が消し飛ばしてくれることを願った。

落ち着かない気分の川上は、砂浜を一キロほど歩き、その掘建て小屋の前に立った。

気配を感じたのか、中から声がかかった。

「どうぞ、お入りなさい」

「失礼します」

粗末な木の扉を開けると、黒い顔面マスクをした小さな老人があぐらをかいていた。

ぼろぼろの衣類は、川上に陽羅義光を想わせた。

その姿は、漁師というよりも、仙人か修行僧か、あるいは乞食に見えた。

陽羅のあばら家よりも小さい三畳ほどの部屋に、調度品らしきものは何もなかったが、どういうわけか小さな雛壇があって、雛人形が飾られていた。

川上はすぐに麻暮正作だと感じ、膝ですりよると、

「麻暮先生、ご無沙汰しております」

麻暮は笑いながら、

「ケケケ。

川上君、久しぶりだねえ。

よくここが解ったね。

なるほど、その利発そうなロボット君が探索者かい」

「初メマシテ、ナカタデス。

麻暮先生ノ話ハ、川上サンカラ、ヨク聞カサレテイマス」

「よろしく、ナカタ君。

でも、ボクは先生なんかじゃないよ。

漁師の正作爺さんさ」

そこで川上が大声を放つ。

「しかし、麻暮先生に戻ってもらわねばなりません」

麻暮は、雛壇に供えられていたひなあられを出して、
「何もないがこんなものでも食べてください。
いま湯を沸かします」
「いやいやお構いなく。
僕は重要な依頼でお伺いしたのです」
麻暮は上げかけた腰を降ろして、
「ごぞんじだろうが、ボクに娘が誕生しました。
ボクは娘のために、否、娘が生まれたボクのために、残りの人生を使いたい。
残りの人生は、ひたすら健康的に、一日でも長く生きたい。
それがボクのためです。
探偵稼業は廃業です」
すると川上はさらに大声を放つ。
「それは困ります、それは困ります。
麻暮先生だけが頼りなのです。
どうやら荒野大人が、また暗躍を始めたようです。
郷田先生も美々社長も、監禁されているはず。
僕はその郷田先生の指示で、ここにやってまいりました。
探偵稼業は廃業しても、天下の麻暮先生としてのご活動をお願いします。
荒野大人の暗躍を食い止められるのは、麻暮先生しかおりません」
荒野の名を聞いたとたん、麻暮の黒いマスクが突如赤くなった。
のみならず燃え上がった。
川上はそう感じた。
そして川上は感動を覚えた。
どこからか鉄仮面を取り出した麻暮が、おもむろにそれをかぶったのである。
その仕種を、川上は厳粛な儀式として感じた。
「荒野め、しぶとい奴だ。
ケケケ、ボクの出番がやってきたようだ。
荒野め、なぜにボクを、一介の老いた漁師にさせてくれないのだ。
さあ、川上君、この小屋は閉めます。
しばらく郷田邸をお借りしましょう。
あそこを拠点に、川上君とナカタ君とボクとで、最適の救出作戦を練りましょう」
「解りました、そうしましょう。
未来計画カンパニーも一時閉鎖します」

しばしの後、七つ道具と雛人形を担いだ麻暮は、川上の車に向かって砂浜を歩いていった。

川上はナカタと一緒に先に車に戻り、蝶子にメールを送っていた。
麗子の歓喜の顔を思い浮かべながら。

【麻暮先生と一緒に、これからそちらに伺います。麻暮先生に温かく美味しいスープをお願いしますと、麗子さんにお伝えください】

二〇三一年、三月三日、正午。

麻暮正作と川上宙門とナカタは車を降りて、郷田邸の玄関前にいる。中から麗子が飛び出して来て、麻暮に飛びついた。麻暮は麗子の背中を撫でながら、「いい子を産んでくれてありがとう」と優しい声で云った。麗子はなかなか、麻暮から離れようとはしなかった。それは、救いを求める人間が藁を掴むのよりも、強い抱擁であった。川上とナカタも、立ち尽くすばかりであった。(もしも美々社長を救い出せたなら、そのとき彼女は僕に、こんなふうには飛びついて強く抱き締めてくれるだろうか) そんなことを川上は思って、少々妬いていた。「お腹がすいたよ」という麻暮の声を合図に、ようやくみんなは中に入った。麗子の作った野菜スープと野菜サンドを、蝶子が食卓に並べていた。麻暮は食事の前に、壁際に雛壇を作り、雛人形を飾った。麻暮はその前で、右手に麻子、左手に大介を抱えて、川上にスマホで写真を撮ってもらった。その様子を見ていた蝶子は、すなまそうな顔で、「こんな子を産んじゃって、荒野さんに叱られるわね」とつぶやいた。麻暮はややきつい声で、「こんな子なんて云ってはいけない。この子がこんな子なら、ボクはこんな爺さんということになる。荒野は叱るどころか、喜んでくれると思うよ。ボクは君よりも、荒野のことはよく解っている。これはボクの予感なんだが、君と荒野の子は、世界を動かすほどの立派な男子になると思うよ。ちなみにボクは、君と荒野の子と云ったが、子供はみなそれ以前に世界の子なのだと思うね」蝶子は、麻暮に感謝のまなざしを向けた。みなは食卓についた。「これは美味しい、天下一品だ。

ボクはこれほど美味しいスープは初めてですよ」
麻暮の大袈裟な言い方に、川上も頷いた。
スープを飲まないナカタも、
「コレハ美味シイ」
と麻暮の真似をしたので、みなが笑った。

二〇三一年、三月三日、午後三時。

麻暮正作と川上宙門とナカタは、郷田邸の二階に居る。
麗子と蝶子と赤ん坊たちは、階下に降りて来ている。
二階は作戦会議室となり、すでに二時間が経過していた。
一階からは、物音も赤ちゃんの泣き声も聴こえない。
緊張していた川上が、つと深呼吸をした。
それから、麻暮とナカタに対して、
「僭越ながら、それではそろそろ救出計画をまとめてみましょう。
郷田先生と美々社長が、監禁されているにしろ軟禁されているにしろ、西園寺邸
のどの部屋なのか、それをまずナカタ君に察知してもらいます。
それが解ったら、僕の運転で、西園寺邸の天空にヘリコプターを飛ばします。
部屋の屋根か壁を壊すのは、危険な爆弾を使わず、レーザー光線でやります。
直後麻暮先生がロープを付けて飛び込み、ふたりを救出したら、そのままヘリコ
プターを葉山の海岸までやって、そこで降ろします。
ふたりが元気でなかったら、ナカタ君にメールをするので、救急車の手配をお願い
します。
ということでしょうか」
川上は麻暮を視た。
麻暮は腕を組み、
「まあ、ボクの思案もじっさいそういうことなんだが、改めてまとめてもらおうと、
いかにも乱暴すぎますなあ。
ヘリコプターの音を聞き付けたか、へりの姿を監視カメラでとらえた時点で、荒
野はふたりを別室に隠し、もしかすると恥も外聞もなく、警察に通報するかもしれ
ません。
計画を変更しましょう」
「その可能性はゼロではありませんが、それでは麻暮先生には、他に対策が」
川上の言葉に麻暮は自嘲の笑いを漏らした。
「ケケッ。
その対策とやらは、思いつきにすぎないんだが。
突然、救急車で乗り込みませんか。」

ナカタ君の運転、川上君とボクが救急隊員になりすまし、西園寺邸にずかずかと乗り込む。

病人はどこだどこだと、邸中を捜しまわるって寸法。

もちろん、部屋の目安はナカタ君に事前に察知してもらいます」

「それは面白いし、危険性もはるかに小さいですが」

川上は不安そうな顔をした。

「救急車をどうするか。

面の割れた川上君とボクの面をどうするか。

そういうことが心配なんでしょう。

救急車はボクが手配します。

消防署の署長は懇意にしていますから、事情を話して一台借りる。

面に関しては、それこそ精巧な面をつけましょう。

ぬらりひょんみたいたったという荒野よりも、もっと精巧な面を作れる業者を知っています」

川上は手を打ちならし、

「それでいきましょう。

それなら、強引にやらなくとも荒野大人に一本とれるって気もしますし、おふたりに何か問題があれば、わざわざ救急車の手配もいらず、一石二鳥って感じもします」

「ちなみに、荒野には相棒がないのかい」

「そうですね、いまは化け猫くらいですか」

化け猫と聞いて、麻暮は長大なコードの中に現れ、麻暮が叩き殺したはずの、闇猫と猫姫を思い出した。

「ソレデ決行ハ」

ナカタが聞くと、麻暮は簡潔に、

「救急車の交渉はこれからすぐに。

業者による面の制作に一日。

決行は明日の深夜」

「了解しました」

川上は立ち上がると、麻暮のために風呂の用意をした。

「川上君は気がつくね。

ケケケ。

救急隊員は、こんなに臭くはないだろうから」

「僕はそうは云っていませんよ。

麻暮先生にはお疲れと思ひまして」

「ソノ前ニ、甘酒デ前祝ノ乾杯ヲシマセンカ」

ナカタが云うと、麻暮は剽軽な声になって、

「そんなことを云うロボット君は初めてだねえ。

川上君は、凄くて愉しいものを造ってくれましたねえ」

二〇三一年、三月四日、午後十二時。

麻暮正作、川上宙門、ナカタは、救急車に乗り込んでいる。

「デハ、出発シマスヨ」

と、ナカタ。

「ケケケ。

救急車日和だねえ」

と、麻暮。

その面を見ながら、

「麻暮先生はずるいですね。

そんなに若くてイケメンにしてもらって。

僕なんか、どう見ても初老のオヤジですよ」

と、川上。

「敵を騙すには、まず味方からと云うでしょ。

若くてイケメンの川上君が、若くてイケメンの面では、美々さんにすぐに解ってしまう。

ギャップと云うか、振り幅が大きいほど、効果も大きい」

麻暮の説明に、見送りの蝶子が、

「そうそう」

と相槌を打った。

麗子は麻暮の面にうっとりしていた。

「旦那さま、お気をつけて」

救急車はサイレンを鳴らしつつ出発した。

時速100キロで葉山を目指した。

けたたましいサイレンをさらにけたたましくして西園寺邸に到着すると、おあつらえむきに荒野大三郎が出て来た。

黄金仮面ではなくぬらりひよんの面をつけていた。

「なんじゃなんじゃ」

と云うのを聞き流して、

「重病人が居ると、西園寺さんから連絡を戴きました」

と云いながら、救急隊員の恰好をした川上と麻暮は、遠慮なく素早く中に入って行った。

一階も二階もひとつずつ部屋を確認し、鍵が閉まっている部屋は、麻暮がかつて竹田金之助に教えられた方法で開けた。

そして、ついに、郷田狂介と岬美々を発見した。

その窓のない朱塗りの部屋は、湿った陰惨な、獣臭い空気と血液の臭いがした。ふたりとも全裸で、身体中に無数の傷痕があり、新しい傷からは血が滲み出ていた。

気絶しているのか、睡眠薬でも飲まされているのか、ふたりは眠っていたが、呼吸も脈も問題はなかった。

麻暮が郷田を、川上が美々を背負った。

荒野がやってきたので、

「やっぱり西園寺さんの連絡通り、重病人がいましたね」

と云いつつ運んだ。

荒野は返す言葉がなかった。

郷田と美々を収容して、救急車は発進した。

この間、十分足らず。

連絡を入れてから「湘南緊急対応病院」に向かった。

二〇三一年、三月五日、午前三時。

湘南緊急対応病院で、麻暮正作は郷田狂介のベッドに付き添い、川上宙門は岬美々のベッドに寄り添っている。

(ナカタは、蝶子と麗子への報告も兼ねて、郷田邸に戻っている)

ほぼ医者の方の云う通りの時間に目覚めた郷田は、

「ここはどこ、あたしはだーれ」

とボケをかました後、

「ここは手術室ですか。」

あなたが手術してくれるのなら、死んでも悔いはないわ」

真剣な声で、まだイケメンの面を付けたままの麻暮に云った。

「ケケケ。」

ボクだよ、郷田さん」

麻暮が正体を明かすと、郷田は急に涙ぐみ、

「やっぱり生きていたんですね、麻暮さん。」

でも、声は麻暮さんでも、顔はジャニーズ。

ここは、地獄かしら、天国かしらん」

郷田が戸惑っている風なので、麻暮はいままでのあらましを伝えた。

「救急車で乗り込んだが、まさか救急車が必要な事態とは思わなかったよ。」

荒野に何をされたんだい」

「荒野大人は、自分では手をくたさないわ。」

化け猫にやられたのよ。

味方になれとの、一種の拷問兼催眠術よねえ。
美々ちゃんは、化け猫の子供にやられていたわね」
（やはり叩き殺したはずの闇猫と猫姫だ）
と麻暮は思い、
（化け猫が化けて出たら、普通の猫になるもんだが）
とも麻暮は思い、もしも一日二日救出が遅れていたなら、郷田も美々も荒野の術中にはまっていたかもしれないと感じた。
「ところで、麻暮さん」
郷田が真剣な眼と微笑んだ口を向けた。
「改まって何でしょう」
「そのイケメンの面、そろそろ取ってもらわないと、あたし惚れちゃいそうだわん。
仮に、あたしと立場が逆なら、救出する前に犯しちゃうかも」
「ケケッ、そうかい。
それならこの面は、郷田さんにあげるよ」
麻暮も微笑んだ。

隣の病室でも、美々が目覚めていた。
川上から、あらましを聞かされた美々は、
「もう、川上さんに内緒の動きはしないようにするわ」
反省が顔に出ていた。
それでも美々らしいひとは、ちゃんと付け加えられた。
「川上さんったら、私の裸をしげしげ観察したんでしょうね」
川上は苦笑し、やはり川上らしい台詞で返した。
「観察はしませんが、目を見張りましたね。
傷ついて血にそまった美女の裸体が、これほど魅力的とは知らなかったものですから。
でも、猫のひっかけ傷ではなく、虎に噛まれた傷のほうがそそられますけど」
「いやーね」
と云って、美々は川上の手を握った。
川上も手を握り返し、
「もう危ないこと、背伸びすることは、やめてくださいね。
ぼくたちが行動を起こさなければ、あの暴行とあの裸体、何とネット配信される予定になっていたんですよ」
「ゲロゲロ、西園寺さんってそんなことできるの」
「ぼくが調べたところによると、裏ネット界のビッグスターとのことですよ」

二〇三一年、三月五日、正午。

退院した郷田狂介をいたわりながら、麻暮正作は郷田邸に戻る。
(美々も同時に退院したので、こちらは川上宙門が連れて帰った)
蝶子と麗子が出迎え、かいがいしく郷田の面倒をみるので、郷田は涙声になって、
「この居候のお姉ちゃんふたりに、こんなに優しくされたの初めてよ」
産後の肥立ちが悪い蝶子は、皮肉っぽい声で、
「だって、郷田さんったらいつだってだれよりも元気なんだから。
妊娠だってしないし、優しくしてあげる余地なんかないわ」
「お蝶さんったら、そんなこと云うんじゃないの。
郷田さんは私たちの恩人。
いつだって優しい野菜ちゃんの気持でいるのよ」
歯が浮くことを云いながら、麗子は得意の野菜スープと野菜サンドを持ってきた。
郷田はもっと涙声になって、
「せっかくのスープが塩っぱくなっちゃうわね」
「塩分控えめだから丁度いいかも」
なんて笑う麗子だったが、いつのまにか麻暮がいなくなっていることには気づいていない。

二〇三一年、三月五日、午後一時半。

麻暮正作と川上宙門は、葉山の海岸で待ち合わせをしている。
今日は波が荒い。
それでも七里が浜に較べれば、ゴミがほとんど落ちてはいないし、流れ着いたりもしない。
そこから水平線と逆の方向、四十五度上方に、西園寺金時邸がある。

ほぼ同時にふたりはやってきた。
お互い、郷田の様子と美々の様子を報告し合った後、麻暮は済まなそうに、
「さっそくだが、また力を借りるよ」
「解っています。
化け猫退治ですね」
川上は云って、袋を見せた。
「麻暮先生に頼まれた、猫いらずです」
「叩き殺しても死なない化け猫は、これにかぎる」
「他にも用意しましたが」
川上は別の袋を見せた。
「あらま」

「またたびです。

これを食べると又旅に出ると云われています」

「ケケケッ。

とにかく今回は、西園寺の、いや荒野の両腕をもぎとること。

そうすれば、さすがの荒野だって、次の両腕か次の部下ができるまでは、おとなしくしているしかない」

「おっしゃる通りです。

それで、化け猫退治はそれほど厄介でしょうか」

「闇猫と猫姫の親子なんだが、何せお喋りな哲学猫だからねえ」

「猫なのに、引っ掻くだけでなく喋るんですか」

川上は啞然としている。

「闇猫と猫姫は、生と死のはざまに存在したボクと荒野の、幻覚がうみだした産物なんだが、しかも両者の幻覚が合体してうまれた産物なんだが、何かのはずみで、そう、はずみで、次元を飛び越してしまったんだな。

そのはずみは、ボクが作ったものかもしれないし、荒野が作ったものかもしれない。

そんな、宇宙人以上に厄介な化け猫を退治するのが、容易なはずはないね。

ケケケ、荒野め。

いままで、川上宙衛門、木下弁太郎、川上宙門、木下太郎、猪鹿蝶子などの有能な配下に恵まれてきたが、いよいよお化けを配下にする事となったか。

末期状況と云えば、当たらずとも遠からずだが、消える寸前に蠟燭の火は明るくなる。

とにかくまたナカタ君の力を借りたい」

「はい、ナカタは車で待っています」

車の中で、麻暮はナカタに尋ねる。

「お喋りな化け猫退治に、猫いらずよりも有効なものはなにかね」

ナカタは即座に答える。

「麻暮先生ハ、オイディプスト、スフィンクストノ、謎々対決ヲ御存知デシヨウカ」

「それは、ボクならずとも知っている人は多いと思いますよ。

スフィンクスの謎かけは、『朝は四脚、昼は二脚、夕は三脚のものはなにか』だったよね。

だれもその謎の答を云えず、スフィンクスに食い殺された。

だがオイディプスにだけは、『それは人間である』と解かれ、スフィンクスは海に身を投じて死んだ。

そうか、ナカタ君、ありがとう、ナカタ君。

お喋りな化物はきっと謎かけをしてくる。

それを解いたなら、奴は往生する。

ケケケ、頑張るよ。

年の功というものを発揮してみますよ」

車が出発し、格別スピードを出したわけでもないのに、十五分で西園寺邸の前に着いた。

麻暮の鉄仮面を監視カメラで見たせいか、荒野は現れなかった。

イヤホンを押すと、西園寺の声で、

「まさかまさかで、やられましたかの。

それにしても、麻暮先生ともあろう方が、救急車とは姑息な手ではないですかのう。

気分がひどく悪いから、わしは面会拒否とさせてもらうが、よろしいかのう。

よろしくとも、よろしくなくとも、拒否ですがの」

麻暮と川上は苦笑しながら、庭の東屋まで行って腰を落ち着いた。

そして池の中の鯉を眺めた。

土佐犬くらい大きな黒猫が登場するのに、五分とかからなかった。

「やあ、闇猫君、おひさしぶり」

麻暮が声をかけると、

「しぶといな、麻暮」

闇猫は声を発した。

「しぶといのはお互いさま。

豚姫じゃなかった、猫姫はどこにいるんだい」

「ここにいるよ、麻暮」

東屋の屋根から声がした。

声は落下し、闇猫の背に乗った。

「まるで、おんぶお化けじゃないか」

麻暮がからかうと、

「あんたの背後霊になってやろうか」

猫姫は憎々しく云った。

しばらく闇猫と猫姫は、金色の目で麻暮を睨みつけていた。

しびれを切らした風に川上が云う。

「荒野大人に会いたいんですが」

闇猫は猫姫よりも憎々しい声で、

「ちんぴらとは口をきかねえよ。

おまえたちが、荒野大人に会いにきたのでないことは、ちゃんと解っている。

おまえたちは、うちらを退治しにきたんじゃろ」

麻暮は手を打ち鳴らして、

「闇猫君、相変わらず飲み込みが早い。

知っているなら、話も早い。

今回は面倒なお喋りは抜きだ。

早いところ、謎かけ勝負といこうじゃないか」
闇猫は、猫姫に、
「謎かけ、やってやれ。
どうせ、解けん、神様だって解けん」
それから麻暮に、
「解っているな、麻暮。
解けん場合は、このイケメン兄さんをうちのランチ、としていただく」
「解けた場合は」
「そらあ、古き伝説に従って、自死するよ」
「ケケッ、約束だぜ」
「そらあ、うちの台詞よ」

猫姫の謎かけは、こういうものであった。
「朝はゼロ脚、昼はゼロ脚、夜はゼロ脚のもの」
「ケケケ。
そんなものは五万といる。
魚類とか蛇とか蚯蚓とか」
「焦らないの。
謎かけは、まだ半分よ。
だから、泳げない歩けない動けないものは、なーに」
麻暮は沈思黙考した。
猫姫は意地の悪い笑みを漏らした。
けれども、麻暮はついていた。
そのものを、抱いたばかりだったからである。
「ケケケ、解ったよ。
それはボクがいちばん好きなもの。
それは、赤ちゃんさ」
闇猫は顔をあげ、猫姫を視た。
その目はすでに金色ではなかった。
闇猫はためらうことなく、猫姫を背に、池の中に飛び込んだ。
無数の鯉が群がる。
むろん、浮かびあがることはなかった。
麻暮と川上は、無言で引き上げた。

池のほとりに、墓石が置かれたのは翌日であった。

二〇三一年、三月十日、午前九時。

麻暮正作は郷田狂介の作った朝食をとっている。

二階では、産後の肥立ちが悪い蝶子は寝込んでいて、麗子が赤ちゃんにミルクをあげている。

「これで解りましたよ」

麻暮がつぶやくと、

「あたしが不死身だってこと、ようやく気づいてくれたのね」

すっかり傷の癒えた郷田は、いつもの調子が戻ってきていた。

「いやいや、この郷田さんの野菜スープの美味しさ。

郷田さんが麗子さんに、作り方を教えてくれたんですね」

郷田は照れ臭そうにスープを一さじ飲んだ後、

「たしかにあたしが教えたんだけどさ。

困ったことに、麗子さんの方が上手になっちゃったわね」

「そういうもんですよ。

郷田さんは兄貴分であり師匠格でもある、舟木英介さんから、探偵の本道を教わった。

そして今や、舟木さんを超えた。

ボクは、玄さんか金之助さんを、後継にしたかったのだけれど、思い虚しく先立たれてしまった」

麻暮が暗い声を出すので、郷田はわざと明るい声で、

「朝っぱらの話題じゃなくなってきたわよね。

話題を変えて、どうせならもっと暗く、その後の西園寺の、いえ荒野大人の動きを、麻暮さんに報告しないと」

「おや。

そんな情報があるの」

麻暮の鉄仮面の奥の目が光った。

郷田はわざとらしい洪面を作って、

「あたしの顧客には政治家も官僚もいるからさあ。

聞きたくもない噂が耳に入るのよね」

「具体的には」

「荒野大人イコール松本玄信の弟子筋が、官僚のトップや内閣の中枢に居るのよ。

荒野は、秘書らしきモデル風双子美人を彼らとのパイプ役にして、ときとして美人局にしてまで、新型原発を湘南に誘致しよう」と

「つまりそれは、美々ちゃんに去られ、闇猫猫姫には自死されたので、いわゆる『美波／美島計画』を『原発計画』に変更しよう」と

「変更だけど、本質的には変更じゃないかもね。

だって、せっかく作った原子力発電所をあえて破壊すれば、『美波／美島計画』どころじゃないからさあ。

もしかするとこっちが本命だったのかも」

「それはそうかもだね」
郷田は鼻をうごめかせて、
「この荒野大人の新しい企みを、あたしは勝手に、『つんではくずし計画』って名づけているわ」
『つんではくずし計画』、ですか。
なるほど、戦国時代の刑罰ね。
捕虜に積みせた石垣を崩す、積んでは、崩し、積んでは、崩し」
「人間性を抹殺する点に於いては、おんなじでしょ」
「まあしかし、核ミサイル開発ではなく、原発の再開発でよかったくらいか。
強引にやらなくとも、住民運動を煽動するとかして、事前に食い止めやすい」
郷田はこんどは本式の洗面を作って、
「それがさあ、麻暮さん。
あたしの予見では、『つんではくずし計画』と核ミサイル開発は、裏表の関係。
裏を見せ表を見せて散る紅葉。
津波で新型原発を破壊させるのではなく、核ミサイルで破壊させるって寸法」
「荒野なら、そこまでやりそうだね」
「その核ミサイル開発を、あたしは『かくかくしかじか計画』って名づけたわ。
意味はなんとなく解るでしょ」
「ボクみたいなアナログ人間には、解りやすい名称で、いいね」
麻暮の声は暢気だった。
「イイネ、じゃないわよ、麻暮さん。
またまた大仕事ができちゃったわよ。
今度はもしかすると、日本政府相手になる。
それどころか、輸入元のアメリカ相手になるかも」
「ケケッケケ。
だれが相手でも、どこが相手でも、郷田さんが付いていれば、鬼に金棒」
声は暢気だが、麻暮はとっくに腹が決まっていたのだ。
美々を取り上げられ、闇猫猫姫まで消された荒野が、黙っているわけではないと考
えていたのだ。
「あらま。
麻暮さんが鬼ってのは解るけど、あたしに金棒があれば、オカマなんかになっ
てないわよん。
金棒でなくとも、ウグイスの鳴き声くらいは出せるかしらん」
麻暮は思わず吹き出し、
「ハルマゲドンなんて言葉をボクは思い出しているんだが、郷田さんはカマアゲド
ンですかね」
「麻暮さんったら、ひどーい。
オカマは自分ではオカマっていくらでも云うけど、人にオカマオカマ云われるの
は、厭なのよ」

「ケケケ、ごめん、ごめん。
仲直りにハグを」
麻暮は立ち上がった。
郷田は畏れ多いと、
「握手でお願い」
と云った。
麻暮と郷田は握手をした。
いまや荒野と荒野の計画を粉微塵にできるのは、世界中でこのふたりしかいなかったが、ふたりにそんな気負いはなく、すくなくとも郷田は郷田なりに、
(これでまた当分、遊べそうだわ)
と思った。
そうして頭のなかで、
(『つんではくずし計画』『かくかくしかじか計画』) と、繰り返しつつやっていた。

二〇三一年、三月十一日、午前六時。

麻暮正作は、郷田邸の別館で眠っている。

深夜からつい一時間前まで徹夜で、郷田狂介と作戦会議をやっていたのだ。
作戦会議に先立って、核や原発に就いて、郷田と語り合った麻暮は、戦前も戦後も知らぬ郷田が、麻暮を圧倒するほど喋りまくるので、麻暮はこよなく頼もしく思われた。
「被爆国としての義務」
という言葉が郷田は連発した。
「国の未来のエネルギーは原発に頼る他はない、なんてろくな知識もないくせに、アメリカかに原発を買わされた当時の中曽根首相は、極刑に値するわね。
ヒロシマ、ナガサキ、そして、フクシマ。
その被害の隠蔽に尽力しているその体質が、現在の政府にも継続しているのよ。
あたしはさあ、反核運動も反原発運動もしてこなかったけどね、人並に憂えてきたの。
それがさ、こうして赤ちゃんをふたりも自宅で抱えることになってみると、憂いは百倍になるわね。
そうそう、あたしはお金に汚い探偵みたいに思われているけどさ、被爆者からの依頼なら無償で引き受けるわ。
残念ながら被爆者からの依頼はなかったけどさ、被災者からの依頼はあったわ。
あたしはさあ、金之助さん以上の義賊かも」

それから、郷田はこんなことも云った。

「麻暮さんは、気づいたかしら。

西園寺邸の玄関にも応接間にも居間にも各個室にも、いたるところに絵画が飾ってあるでしょう。

京都と湘南の絵が多いけれど、あれはみんな、かつて美術界の巨匠と云われた北山極斎が、つまり荒野大人が描いた代表作ばかりよ。

麻暮さんは、ご存じかしら。

没後半世紀、となっているいま、北山極斎の絵画は爆発的な人気でさあ、相場はなんと号一億。

ということは、飾ってあるものだけで数兆円はくだらないわ。

西園寺金時は、もしかすると日本国の年間予算と同じくらいの資産を持っているかもよ。

厩大な金力と権力に対抗するには、ふつうテロしかないんだけどさ。

麻暮さんとちがって、あたしは穏健な性格で、コモンセンスがあるからねえ」

麻暮は気づいていたし、ご存じでもあったが、何も云わなかった。

穏健な性格で、コモンセンスがあるという、郷田の自己分析には賛成だったが、何も云わなかった。

そうして郷田の作戦は、簡潔にまとめると、こういうものであった。

荒野を倒すのも、官僚のトップを倒すのも、政府の中枢を倒すのも、机上の空論で片付くレベルではない。

それなら、荒野と官僚のトップや政府の中枢とのパイプ役、つまり秘書らしきモデル風双子美人を倒すのが手っ取り早い。

但し、この双子美人の正体はまだ解っていない。

くの一忍者かもしれないし、サイボーグかもしれないし、放射性物質の塊かもしれない。

そこは、動きを探りながら見極めていく他はない。

どちらにせよ、マッチョで凶暴な用心棒よりも、ああいうタイプのほうが手ごわい。

麻暮もほぼ同じ考えだった。

ちがうところは、双子美人を倒さずに、懐柔することだった。

けれども麻暮は自分の考えは述べず、郷田を立てて、

「それがいい、それでいこう」

とだけ云った。

二〇三一年、三月十一日、午前八時。

麻暮正作は、郷田邸の別館でまだ眠っている。

だが、本館から郷田のものとおぼしき叫び声が聞こえると、すぐに眼を醒まし、郷田のもとに駆け付けた。

郷田は一階のソファで泣きくずれていた。

「どどど、どうなっちゃてるのよん。

こここ、こんなひどいことって、世の中にあるのかしらん。

ままま、まさか、〈愛信会〉教祖の日下典禪が、怖い呪いでもかけているんじゃないでしょねん」

麻暮が郷田の肩に手をかけると、郷田は麻暮の手を握って、

「あああ、麻暮さん、どうか気をたしかに持ってね。

れれれ、麗子ちゃんが、冷たくなっているのよ。

産後の肥立ちが悪かったのは、お蝶さんのはずなのに。

だから、麗子ちゃんに朝食作りを手伝ってもらおうと、二階に行って声をかけたら、うんでもすんでもない。

ななな、なんてことなの。

心臓マッサージもやったし、人工呼吸もやったし、救急車も手配したけど、もう完全に冷たくなっちゃっているのよ。

あああ、麻暮さん」

麻暮は声が出なかった。

二階に駆け上がろうとしたが、腰が抜けたのか足が痺れたのか、まったく動かなかった。

二〇三一年、四月一日、午前十時。

麻暮正作と郷田狂介は、鵜沼の海岸に居る。

砂浜置き去りにされた巨きな流木に、並んで腰を降ろしている。

麻子は、猪鹿蝶子にすべて面倒をみてもらっている。

三月中に、竹田金之助の遺骨は、父親の小林金助の墓へ、美村麗子の遺骨は、蝶子とも相談をし、家族の元へ丁重に納めた。

この半月以上、まったく声もなくまったく動かなかった麻暮であったが、郷田に誘われてここにやってきた。

なんとかこられたのは、今日が〈エイプリルフル〉だったからである。

あの日から麻暮は、

(嘘だ、茶番だ、ファルスだ、フィクションだ)
とアタマのなかでつぶやき続けてきた。

想えば麻暮は、その若き日、師の陽羅義光から毎朝、宮本武蔵の『独行道』を独唱するよう指導されたものである。

【*わが事において後悔せず
*身にたのしみをたくまず
*身ひとつに美食を好まず
*自他ともにうらみかこつ心なし
*私宅においてのぞむ心なし
*恋慕の道思いよる心なし】

などなど総てに精進貫徹してきたつもりであるが、ここに来て、このひとつだけは、どうすることもできなかった。

【*いずれの道にも別れを悲しまず】

海は明るく輝き、波は静かに潮騒を奏で、世界の永遠性を思わせた。
郷田は、詩をくちずさみはじめた。
伊東静雄の『わがひとに与ふる哀歌』である。

【太陽は美しく輝き
あるいは 太陽の美しく輝くことを希い
手をかたくくみあわせ
しずかに私たちは歩いて行った
かく誘うものの何であろうとも
私たちの内の
誘われる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとえ
鳥々は恒に変わらず鳴き
草木の囁きは時をわかたずとするとも
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無辺な広大の讃歌を
ああわがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでいる
音なき空虚を
歴然と見わくる目の発明の

何になろう
如かない 人気ない山に上り
切に希われた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照さするの【】

聴きながら麻暮は、お経よりも有難いと感じ、
「ありがとう」
と素直に云った。
鉄仮面の横顔を眺めた郷田に、些かの安堵感が沁みてきた。

「水平線を白い船が行くね。
あの船はどこへ行くのだろう」
麻暮がつぶやいた。
目を凝らしても郷田には見えなかったが、
「白い船は黄泉の国の遊覧船よ」
と口からでまかせに云った。

ふたたび沈黙のときが流れた。
どこかでママを呼ぶ幼子の声がする。
麻暮がつと口を開く。
「ねえ、郷田さん。
子供にとって、一番大切なのは、母親なんだろうね」
「それはそうよ。
だから、この件が解決したなら、その鉄仮面は代えたほうがいいわ」
「どう代えるんだい」
「たとえば、〈おかめ・ひよっこ・はんにゃの面〉って云うでしょ。
麻暮さんの鉄仮面は、云わば般若ね。
おかめの面に代えるのよ。
そしたら、麗子ちゃんの代わり、ママの代わりができるわ」
麻暮はしばし遠くを視ていたが、
「そうしよう」
と云った。

ふたたび沈黙のときが流れた。
海鳥が鋭く鳴いた。
こんどは郷田がつと口を開く。
「麻暮さんに前から聞きたかったんだけどさ、世界一の探偵の見識で見て、あたし
は探偵としてどんなもんかしら」
麻暮はすぐに答える。

「ケケケ、たしかにボクは昔、日本一の探偵とか、世界一の探偵とか、不世出の探偵とか呼ばれることがあったけれど。

今やその称号は、郷田さんに奪われてしまった」

「まあ」

麻暮の予想外の言葉に、郷田は驚き、感激もした。

「でも、肩書きなんかつまらんものさ。

肩書きというものは、現世では通用しても、あの世では紙切れにすらならない。

いや、もしかすると、エラソウナ冠のやつほど、地獄でひどいめにあうかもしれないよ」

「あたしは地獄なんか信じていないからいいけど、エラソウナ冠のやつほど、現世でもひどいめにあうかもしれないわね」

「そういうことさ、ケケケ。

ボクたちは、自分では無冠の帝王でいたいね」

「そうね、そうね」

と云いながら、郷田は麻暮が、世界一の探偵麻暮正作になってきたことを感じた。

そして、いよいよ活動開始のときだと気を引き締めた。